

---

# 八号の異世界～ハルケギニア戦役勃発編

田端

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

八号の異世界〜ハルケギニア戦役勃発編

### 【Nコード】

N6052H

### 【作者名】

田端

### 【あらすじ】

アルビオン戦役で勝利した大日本義勇軍そしてルイズと結婚し男爵の位をもらった中川浩二義勇軍大佐。ワケありません皆と現代日本へ向かったその頃、トリステインの対外状況は悪化しつつあった。

## プロローグ（前書き）

### 注意店

- ・ゼロ戦才人に影響されている
- ・ご都合主義
- ・さらに原作から離れ始める
- ・世界の兵器が敵味方問わず登場
- ・兵器の多様化により八号の影がちょっと薄くなる
- ・作者はミリタリー馬鹿

以上の事が許せない方の観覧はあまりオススメできません

## プロローグ

：ダングルテールやラ・ロシエールなど領主となった義勇軍軍人は  
荒廃した土地の再開発を行おうとしていた

また、トリステイン防衛の為に軍備の拡大を  
行う必要があった

一方ダングルテール -

「メイジ達の魔法のおかげで随分と家も  
できてきたものだ」

浩二はルイズやアンリエッタのすすめで  
自宅の建設を行っていた

住む場所がなければ話にならないからである  
さすがに新婚夫婦を兵舎に住ます訳にもいかないし

「あと2日もあれば完成らしいよ」

「感謝しなさいよ、学院を挙げての大仕事なんだから」

「わかってる」

根気強く待ち3日後、10日間の学院をあげた  
工事は終了、そこそこの家はできた

オスマン校長がにこやかな顔で喋ってきた

「これから、家は大きくしてくださいね、とりあえずここまでつくりましたが、さらに大きな家はさすがに、授業もせねばなりませんし」

「わかりました」

「ルイズ、しっかりやるんじゃぞ」

「はい」

ちなみにルイズは学院を特別卒業した  
虚無の事はおおっぴらには言えないので  
戦いに勝ったという功績のみでた

「さて、本格的に、開拓しないとな」

「しかしこの土地、人々が住んでいた痕跡があるのだが？  
なにかあったのか？」

浩二がきくとルイズは急に  
顔が暗くなった

「…虐殺があつたのよ…」

「虐殺？」

いわゆるダンゲルテールの虐殺だ  
ここでは説明しない、しかしそのせいで人口が激減  
今や生き残り数十名が暮らす程度だ

幸い海軍基地の建設や

降伏調印式が開催された事で

多少知名度があがりここでしかとれない

魚を食べるべく観光客がやってきて一時期よりは潤っている

ハルケギニアで鉄製の船は

どんな歴史的建造物よりも貴重で

あるだけで見物になる

またこの日、簡易で雑草もあるが滑走路が完成

第二航空隊として、イエーガー、坂井、西澤、仲本、そして1943年より

実戦部隊に配属されて以来西澤の部下であり戦友である坂東と辻、

彼らがやってきた

飛行機は零戦2機、陣風1機、ヘルキヤット1機、bf109、2機

複葉機すらないハルケギニアのしかも戦略上どうでもいい地域の防空には十分

…というより豪華すぎる面子だ

それでも浩二がこのメンバーをよんだのにはワケがあった

現在大和と伊勢は義勇軍を力を象徴する存在である

戦争になった場合敵軍がこれを狙うのはほぼ確実である  
竜を相手するには対空砲では力不足、戦闘機が必要であると

浩二は考え、その結果がこの豪華メンバーの集結である

このほか、浩二は行政についても学ぶ必要があった

彼は親も軍人、ろくな知識も教えられず

行政事務に関する知識は貧しい

かといってトリスティンで学んでも有効な知識が得られるとは思えない

そこで、春奈の登場である

彼女は義務教育を終え高校生である

また自らも関心があり

そういった事は回りの人間より詳しい

一般常識よりもほんのちよっとだけ詳しい知識を春奈から得る事ができる

実際曾孫に教えてもらうのはちよっと恥ずかしいと思うも

しつかりとした行政を行うには彼がいた時代よりもそういった事がより進歩した60年以上も後の日本に17年間いた彼女に頼るほかはない

春奈は言うまでもなく戦後の人間である

思想はちよっと保守なので浩二とも話があう

ついでにルイズも勉強した、簡単な理由で単に浩二のいた国がどのような政治を行っているのか気になったのだ

まあ、日本国と大日本帝国はちよっと違うのだが

歴史としては2600年以上万世一系の皇族がいるので同じである

春奈は元々人に教えるのが上手なほうなのでわかりやすいでも彼女は困った

二人の理解があまりにも遅い

そりゃあ口だけじゃ理解できないのは彼女もわかっているが…

「うーん…せめて教科書さえあれば…」

妹ももう高1だし…丁度中学校の教科書が

2冊あるけど…とりにいけないしなあ…」

ガチャッ

「やあ、皆さんお久しぶり…ってほどでもないですよね」

コルベール先生がなにをしにきたんだか

わからないが笑顔で入ってきた

しかもアンリエッタ女王までいる…

「私達、中川さんの家ができた事を

お祝いにきました」

「…って…勉強中ですか？」

「はい、ちよつと行政について学ぼうかと…

今基礎としてまず政治とはという所をやっているんですが…」

「どうも理解が難しくして…」

「私も…サツパリわからない」

浩二はまあ文明人だし

死ぬほど真剣に話をきけば理解はできた

しかし長らく文明レベルが中世でストップ

しているハルケギニアで生まれ育ったルイスには

話をきいただけでは理解ができない



環境も環境だけに…

「ですので、ちょうど私が中学の時に

使っていた教科書が妹の分をあわせて2冊あるんです」

「それを使って勉強したいと思うのですが…なんせその教科書は地球にあります…とりに行くのが困難なのです」

本当に困っているようだ

「そういえば、西澤達は日食からやってきたんですが、今夜は確か月食がありましたよね？」

「はい、私の予想では」

「それでも地球とここを行き来するのは可能なのですか？」

「…理論上は可能です、

そうだ今夜行きましょう！」

「その為には…零式輸送機をもってきませんとですね」

かくして浩二、ルイズ、は政治について学ぶために

春奈、そして行きたいのでついていくコルベールとアンリエッタ  
一行は

教科書をとりに行くために地球へ向かう事にした

この地球訪問が…義勇軍を大きくかえる事になる

## プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 1・地球へ(前書き)

さて、今回より現代日本(∴)といっても2007年(へ)新たな登場人物が登場します

## 1・地球へ

今夜、地球へ向かうために滑走路へ向かった

っで…

「…あつた…」

なんと、ラ・ロシエールにあると思っていた零式輸送機があつたのだ

「いやあ、たまたま近くにあつたんですよ」

どうやら以前の式典の時に

置き去りにされていたらしい…

幸い固定化の魔法がかけてあつた為塩害などの被害にもあわず  
また盗難にもあわずその場にあつたのだが

この軍のずさんな管理に

坂井達は抗議したという

「それで、アンリエッタ女王様やコルベール先生まで  
いるとは、なんのご用ですか？」

「実は、我々はこのダンゲルテールの再開発の為に  
ちよつと政治について勉強している所で」

「でもよくわからないから春奈の世界から  
教科書たるものをとりにいくのです」

「へえ、でも別な時代にいたりしないんですかい？」

「コルベール先生の調査では、一番ハルケギニアに近いのが春奈の世界らしい、その世界の最新の時代に通じてるはずだということです、万が一時代が違っても帰還は可能だそうです」

「へえ、なんでも春奈ちゃんが前に言ってた話だと俺たちの世界よりも60年も70年も先の話らしいじゃないですか」

「そりゃあ俺たちも興味があります、是非その場所まで飛行機を操縦させてください、なあ西澤？」

「はい！自分も興味があります！  
はたして日本はあれから立ち直れたのか…とても！」

メンバーは操縦士の坂井、西澤  
そして浩二・ルイズ・春奈・アンリエッタ・コルベールの7人に増えた

しかし、このメンバーは夕方までにさらに増えるという

「やあ、久しぶりだね浩二」

「ギ…ギーシュユ!？」

「なんでも地球とかいう、その高風ちゃんって娘の世界にいくらしいね」

「高風ちゃんがかわって服装をしている…ということとは地球にはもっとお洒落な服があるに違いない!」

「あんたって…それ以外に目標はないの？」

「ん？あるわけないじゃないか」

これはひどいとみんな思った

くらに…

「ようし！新婚旅行としてついていきますよ！」

「はい！私も地球に行きたいです！」

「田口！？シエスタ！？…ってかお前らいつ正式に結婚した！？」

「いやあ、便乗したんですよ、ハハハ」

「今じゃ軍一番の平民新婚夫婦だって、ねえ」

「ねえ」

なんか腹立つけど

まあ新婚旅行にはいい旅だろう

…ってことは？

日本中旅行する予定って事である  
予算を調節せねばならない

「うん」

「大丈夫です、お金は  
大量に持参しましたので」

とはいうがハルケギニアの  
通貨と日本の通貨は違う

…だが

「そういえば、少ない金で買った私宝くじが当たって

3億手に入れたところでこの世界にきてしまいましたからありま  
すよ？日本円」

なんとというご都合主義

しかし春奈のおかげで金銭的に困りそうではない

みんな期待に満ち溢れている

はたして、春奈のいる現代日本とはどのような世界なのか？

2007年なので多少昔だが

春奈の視点では今年である

さあ、今夜、旅に出る…

夜・

坂井・西澤・浩二・ルイズ・春奈・アンリエッタ・コルベール・ギ  
ーシュ・田口・シエスタ

総勢10名が飛行機に乗り込む

「ベルトはしっかりしろよ」

「あの…」

春奈は不安だった

「領空侵犯で自衛隊の飛行機に追尾  
されたりするかも…」

「自家用機ってことでおkですよ！」

実際自衛隊は撃墜はしないが  
追尾ぐらいはする

はたして坂井の言うとおり日本海軍色の  
零式輸送機は自家用機のうちに入るのだろうか？

「あと、過去を完全否定している  
いわゆる左翼っていう人たちに壊されたりしないでしょうか？」

「なあに、大丈夫さ」

バババ…

輸送機にいよいよエンジンがかかる

コルベールの予想では一週間おきに互いの世界で月食があるという、  
地球には

一週間滞在できるのだ

これだけ帰還があり所持金3億もあり  
法律さえ守れば好き放題遊べる



夢のような旅である

本題はあくまでも教科書とりにいくなのだが…

「よし、離陸します」

フルスロットルで零式輸送機は  
離陸した

「目標は…あそこの月ですね」

数分間、上昇しいよいよ突入の時だ

「さあ！突入しますぞ！」

「しっかりつかまって！ベルトをつけて！」

フツ…

ハルケギニアから輸送機は消えた

2007年8月、地球 -

フツ…

突然、日本の空にレシプロ機の  
エンジン音が響いた

「…あれ？」

「風景は…ちよつとかわりましたね…でも以外と静かでしたね…」

「なんだ、ベルトする必要なさそうですね」

案外静かに

地球のアジアにある春奈や、ちよつと時代は違つが浩二達の祖国『日本』へワープした

ハルケギニアと日本ではちよつと時差がある  
今がちよつと日本は明け方である

「…ここは…調布市ですね、調布飛行場があります」

「あそこは外来機も10日まで使用できますし、ちよつといいですね」

細かい事を気にすると

小説として書けなくなるので見逃してもらいたい

この日本の調布飛行場は実際よりも甘い設定になっている

・調布飛行場への新規所属機はみとめない。  
・外来機は最大10日まで駐機を許可するがそれ以上は罰金、または飛行機を頂く。

・年中23：00まで。

・一日三回まで離着陸可能。

・所属機は3年に一回再編成すること。

10日もあれば十分すぎる

零式輸送機は着陸した

元々旧軍の飛行場だけあつて長さ的にも困らない

一方、自家用機所有者は  
その姿を見てびっくりした

なんと日本海軍塗装のしかも

本当に軍用機らしい飛行機が着陸してきたのである

…といつてもすごい驚いたというわけでもなかった

「皆さんあまり驚きませんね？」

コルベールが言った

春奈は答えた

「それは、この世界の人々は飛行機を

見慣れてますし、それにもうちよつとスマートですが

日本の軍用機持つてる人もいますし」

その言葉に坂井と西澤は反応した

「ど…どうということだい春奈ちゃん？」

「私の曾お爺さん、ここに自家用機…っていうより

戦闘機みたいな置いてあるんです」

「えっ？」

「お爺さんなにものですか？」

その話題になると浩二は黙り込む

春奈も気をつかってかバレない程度に紹介した

「元陸軍の軍人です、戦後、飛行機つくってもいい時代に  
なつてから、歩兵だったらいいのですがなんの思い入れがあつた  
のか

つい最近飛燕とかいう飛行機を稼ぎに稼いだお金で造つたらしい  
です」

ゼロ戦 人の平 才吉のような爺である

春奈の曾祖父こと中川浩二はどつち風吹き回しか  
歩兵だつたはずが陸軍の戦闘機を戦後造つたのだ

飛燕：そう、三式戦闘機『飛燕』である

ダイムラー・ベンツ社製のDB601の製造権を獲得した川崎は  
八四〇として国産化した

陸軍は昭和十五年にこのエンジンを搭載した重戦闘機及び軽戦闘機の  
開発を命令した

「運動性能は軽戦闘機に劣るが重戦闘機に勝る

武装は重戦と軽戦の中間を持ったあらゆる戦闘機に勝てる機体」  
をコンセプトによつて設計・開発が行われ、そして、審査のさい

キ60は不採用だつたがこのキ61は予想以上の性能を発揮し三式  
戦闘機「飛燕」として採用

昭和十八年以降南方に配備されるもエンジンの構造が複雑で

整備が難しく稼働率が低いという欠点があつた  
それでもエンジンが快調な時の本機の性能は半端ではなく

米軍機に引けをとらぬ強さを発揮、また体当たり攻撃などで  
B-29を迎撃するなど本土防空戦でも活躍した

なお本機を元に五式戦闘機たるものが開発されたが

こちらにも性能がよく無理さえしなければP-51にも墜とされない

飛行機だったという、元の機体設計がいかにも優れていたかの証明になっっている

浩二達は飛行機から降りる

すると勢いのいいターボのような音がした

「あ、あれ！噂をすれば曾お爺さんが！」

すると相手（と言ってても年老いた浩二）が反応した

「あれ？ 春奈！！」

ご老体ながら元気にこちらに走ってきた

「お前！よかった！」

「妹が心配していたぞ、ハワイにいる両親もだ！」

「ごめんなさい…わけあって…」

「…そのようじゃな」

浩二（老人）は後ろの飛行機と揃っているメンバーを見てなにかあったとはすぐにわかった

## 1・地球へ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

### 3・都心へ行く

翌日早朝・

元航空自衛隊の与謝野と中川老人が皆をまとめた

「では、自分もまだ理解ができないのですが、  
祝、異世界から来た人たちの為に日本旅行5日間へ行きましょう」

最終日一日は準備の為あけるのである  
5日間と短い期間だが日本を旅する事になった

「まずルートを説明します、京王線にのって新宿まで行き  
そこから山手線に乗り継ぎ東京まで、東京駅周辺を見てから  
新幹線で古都京都、これが一日目です」  
「二日目は京都観光、時間があまりないので有名スポット数件と  
梅小路蒸気機関車館でハルケギニアとかいう世界にはない  
列車についてを見ます」

これでも与謝野は一晚でハルケギニアについて  
学んだつもりだ、

「その後東海道線で大阪に、大阪も観光します」  
「この日は大阪で宿泊、京都観光がメインですね」  
「3日目は、なんでもしよっちゅう戦争があるというハルケギニア  
の人や

旧軍出身者の皆さんの為に戦争について学ぶ為に広島へ新幹線で  
行きます」

「路面電車やお好み焼きなどの名物を堪能しつつ

原爆ドームがある平和公園などを観光して、将来的には  
発展するでしょうハルケギニアの為にも、悲劇を知ってもらいます  
その後は宮島を見てチェックインです」

与謝野や中川（爺）はこの世界の戦争について知ってもらいたかった  
特に実戦で戦い絶望を味わった中川老人は特にそうだ  
ハルケギニアで生活する自分や旧軍出身者、そしてハルケギニアの  
人たちに

自らが経験した人の愚を知ってもらい将来のハルケギニアの為にも…  
少々悲しい話ではあるが知るべきだと思った

「4日目はみなさんのリクエストから…兵器とか  
置いてあつて資料がある所？」

どう考えてもコルベールのリクエストだ

「…呉に行きましょうか」

「現代の観点からの旧軍はどんなだったのかを  
旧軍出身者の皆さんにも知ってもらいたいですし」

「その後、呉線で広島に戻り新幹線で大阪へ、ほとんど観光しなか  
つたので

観光しまして再び大阪のホテルで宿泊です」

「最終日は朝一、飛行機で東京まで戻り

お土産を買う、そして皆さん方の地球滞在日の最終日は準備とい  
うことで」

「よろしいですね」

「はい」

「なんか修学旅行みたいね」



春奈は言った

「お姉ちゃん辛うじて修学旅行いけたよね」

「ほんと、二学期だったりしたら終わってたわ」

その後、一行は家を出発、  
京王線の調布駅へ向かった

ここで早速トラブルがおきた  
旧軍出身者は自動改札機なんて知らない  
使い方がよくわからない  
ハルケギニア出身の人々もそうである  
与謝野や春奈などが一生懸命説明し  
なんとか突破した

「すごいぞ！魔法もないのに！おおおお！！」

「落ち着いてくださいコルベール先生！！」

童心に戻ったかのようにはしゃぐ  
コルベールにさすがの浩二も一緒にいて恥ずかしかった  
たしかにすごいけどここまで驚くほどでもない、  
自分たちが今まで大発展したのだからいずれこういうのはできて  
もおかしくないと思った

それに鉄道自体、昭和にもあった

ホーム -

「う…わ…すごい人」

「これほど混雑しているのか？この時代の鉄道は？」

「まもなく、3番ホームに、新宿行き通勤快速がまいります  
黄色い線の内側にたつてお待ちください」

パアアン

「きゃあ！すごいですね！」

アンリエッタはものすごい喜んだ

これがあればトリストインはもつと栄えると思った

一方浩二ら旧軍出身者とルイズ達ハルケギニアの人間は  
目を丸くしてみていた

浩二達の時代にも鉄道はあるが  
これほど進化はしていない、運転席付近からかすかに聞こえた言葉  
にも驚いた」

「10秒延！」

「延着！？ たった10秒で!？」

あまりにも細かすぎるダイヤに  
驚く以外できなかった

そして通勤ラッシュ時に乗ってしまったのか車内はぎゅんぎゅん詰り

「う…汗臭い…これじゃあ僕から女の子が…」

ギーシュはあまりの汗臭さに  
自分の体臭を気にした

「ちょ…ちょっと浩二、あんたの世界ってこれがあたりまえなの？」

「俺にきくな…今から見れば俺らなんて古代人だ、  
現代人の春奈とか雪華とか与謝野さんに聞け…」

「ドアしまりますご注意ください」

プシュー

ドアがしまりさらに客はつめる

「おええ！」

(く…苦しい…暑い…のたれ死ぬ…!!)

「ああ!!零戦のほうが快適だ!!」

坂井がブチ切れるほど

電車はぎゅうぎゅうづめである

「覚悟してください…この後乗る山手線はピークをすぎても  
こんな感じです…」

「しかし…以外と静かですな」

コルベールが真剣な顔でいう

「これが…科学の力なんですか？」

「はい」

「すばらしいの一言だよ」

「次はつつじヶ丘駅、つつじヶ丘駅です」

自動放送、これは現代日本の鉄道において

あたりまえになりつつある、浩二達はまあ女性車掌がいるってことで  
解釈したがルイズ達は顔をきよるきよるさせた

「えっ！？なつなに！？誰よ今の！？ちょっとでてきなさいよ！！！」

「ハハハ、車内放送っていつて、今こそ自動放送ですが、車掌さんが  
次の駅はお乗り換え情報や降り口などを伝えるんだ」

「実に興味深いですな」

そして、新宿・

「うわお！これはすごい！僕好みのギャルがいっぱい！」

「渋谷にいきますか？」

「ギャルいますよ？」

「はいはいどうでもいいから東京とかいうところいこうね」

ルイズはあきれてた

「14番線に電車がまいります黄色い線の内側に立ってお待ちください」

「ここもすごい人ね」

山手線の電車が入線、これで東京まで行く

「あれ？E…231…？これなんですか？」

「形式ですよ」

「え？形式？」

「ここ日本では特急とか以外に列車には名前をつけないのです」  
「かわりに番号をふっておくのです」

もちろん、特急列車にも形式はある  
「スーパーおおぞら」とか「スーパー北斗」なんてのは愛称のようなものである

「ほう…ハルケギニアではちょっとしたものでさえ  
すごい名前をつけるものなのだが…なるほどこれは興味深い」

途中の山手線の車窓をみても  
ご一行は感激するのだった

「おいみる西澤！飛行機が線路走ってるぞ！」

「おおホントだ！飛行機みたいな車両ですな！」

「違います、あれは新幹線って言って早いものは300キロぐらい出したりします」

「ひええ！鉄道がそんなにスピードだすんですか？」

「下手な飛行機より速いんですね」

坂井と西澤は新幹線をみて  
思わず飛行機だと思った

まあ初代の0系のモデルは日本海軍の飛行機  
であるらしいが

東京 -

「見事なレンガ造りの建物ですな」

コルベールは東京駅の駅舎を触った

「かなり細かい単位で精密につくられている  
ハルケギニアの建物とは違う、精密ですな」

「これより三グループにわかれます」

与謝野グループは上野動物園に行く  
メンバー・田口・シエスタ・坂井

以外なのが坂井、動物好きなんだろうか？

中川老人グループは霞ヶ関の官庁街をみにいたり皇居にいたり靖国神社にいたりする

メンバー・アンリエッタ・コルベール・ルイズ・浩二

春奈グループは噂の秋葉原へ

メンバー西澤・雪華・ギーシュ

このルートは多い、春奈からは電気街

ときいたのでどれほどハイテクなものか興味があったのだろう

まあ…一部をのぞいて現実を見る事になるが

「それでは、時間に注意してくださいね」

「はい」

一行は一時解散した

### 3・都心へ行くころ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ



#### 4・東京の旅（前書き）

まったく私は8月6日だというのに  
こんな小説をあげやがって…

この場で1945年8月6日、そして9日に原爆でなくなられた方々のご冥福をお祈りいたします。ちちなみに原爆開発は日本もして  
いたっての知ってますか？

構造的にあれほどすさまじい威力にはならなかったでしょうが

## 4・東京の旅

与謝野グループ

「ここが上野動物園です」

「わあ…」

「あ！光雄！あれかわいい！」

「おおホントだな！」

「なあパンダはいないのですかい？」

「えっ？パンダですか？いますよ」

「やったあ！俺一時期中国で戦ってたんだけどさ！  
本物のパンダはみたことなくて！」

坂井はパンダが

目的で上野動物園にきたらしい

ちなみに今は亡きジャイアントパンダの『リンリン』はこの時  
まだ存命中である

「おお！パンダちゃん！」

「中国で会えんかっただけにうれしいぞ！」

坂井は感激する

「坂井さん、自分もパンダは始めてです」

「あの…リンリンって名前があるんですけど？」

「そうかい！なありんちゃんていいや！」

「勝手に日本人女性名にしないでくださいよお…」

「きゃー！あれかわいい！」

「レッサーパンダですか？そういえば立つとかで有名になりましたな」

「そうなんですか？」

「はい」

上野動物園にいった

皆さんは満足げであった

一方中川老グループ

「あそこが皇居です」

「わあ…私のお城と違って質素でも心が洗われる感じで大変美しいですね」

「ここはかつて宮城とも呼ばれとったんじゃ」

「なるほど、この国は皇帝が治めているのですな」

「いやあ、違いますよお、なんでも

今この国で政治の主体するのは国民らしいからな」

「民主主義ってやつじゃな」

「へえ、すばらしいですね」

「いつかは国民の意思通りにできるように

民主主義ってものを取り入れたいですね」

アンリエッタは日本の政治に

興味津々だ、ここで学んだ事を

後のトリステインの政治にも使おうかなと考えているそうだ

続いて一行は官庁街へ向かった

「あれが、外務省です」

「へえ、政治ってわけてやっているんですか」

「そりゃあ、今は首相だけで全部やるのは

むずかしいからな」

「なるほど、私の国でも政治の参考にします」

アンリエッタは年々国力の

落ちるトリステインを元氣付ける為に

新しい政策を生み出してきたが

それは今から見ればちよつと古い考えであつた

今回の中川老人の説明をきき新たな政策でも

思いついたのだろうか満足げな顔だ

一方コルベールはというと建物に目がいつている

地方の政治を行う事になった浩二、それを手伝う予定のルイズは爺さんの話を真剣に聞いた

「進んでいるんですね、この日本で国」

「まあな、さあ次は靖国神社に行こうか」

靖国

「すごい…」

ルイズ、アンリエッタ、コルベールが見慣れない建物を目にすてすごいと思った中二人の中川はお祈りした

(すまない、みんな、とうとう会いに行くことができなくて…)

英霊達に謝る二人だった

死んで靖国であおうといった

人もいた、その人たちを裏切る行為をして

本当に申し訳ないと思った

その後、中川老人が靖国神社について語った

「そうなんですか…ですが」

私の国では宗教的な問題でこれはできなさそうですね」

その時、変な声が聞こえた

「靖国神社参拝に反対！」

「靖国神社はA級戦犯も合祀されている！」

「アジアの国々に対し多大なる迷惑を与えた日本が  
すべき行為ではない！即ぶち壊すべし！」

プラカードをもった集団が行進していた

「なにかしら？あれ？」

ルイズは不思議そうな目でみた

中川老人は残念そうに語った

「我が国には、理由もロクに語れないのに国策に  
反対する人々がいて、その人たちが日本の政治を妨害し  
たとえそれが成功したとしてもかなりの長時間になってしまう  
じゃ」

「私の国にも反政府的な人はいますが：あんなデモ行進までは……」

「ただ平民に貴族の称号を与えるぐらいで基本は愛国者ですし……」

「まったく、誰が仕込んだのか、残念極まりないです」

「いつかは国民がひとつにまとまり力強い日本になることを  
ワシは願っております」

一方春奈グループ -

「…」

「ごらんの通り、かつての面影を失い  
今はオタクの街なのです」

「感動しました！ボクは感動しましたぞ！」

ギーシュは秋葉原を気に言ったらしい

「うっはあ…：すげえ美少女！」

「ねえねえそのダンディーなお兄さん！」

「おすすめのアニメとかいうやつを教えてください！」

「お姉ちゃん、あの異世界人いつか たんハアハアとかって言っ  
てそうだね」

「典型的な予備軍…：もう目覚めかけてるね」

「どうやらギーシュは二次元に目覚めて  
しまいそうだ」

「さ、私たちはオタクはほつといて電気屋にいきましょう」

「了解」

ギーシュをおいていった

あとで迎えにくると言っておいて

でもギーシュはそれなりに楽しんだという

アニメのDVDとか再生機ごと購入  
普通の漫画とかから同人誌まで買い  
さらに美少女のフィギュアやPC、そしてエロゲー  
まで買ってさらに日本語を覚えるために  
いろいろ書籍も買った

帰り -

「なによその荷物!」

「いやあ…ちょっとね」

「んもお！持ち運び大変ですから

そういうのは帰りにしてください!」

「でも買ったんだ、ドンマイっす!」

「…」

ギーシュは東京駅でもつつこまれた

しかも袋からは商品が見える

みんなこいつと同行するの?と思った

やっぱりアニメのDVDや漫画、しかも同人誌まで

エロゲーとかフィギュアとかまで大量に、これは確かに恥ずかしい

春奈は後悔したという

秋葉原なんて行くんじゃないかと

そのご一行はのぞみに乗り

京都へ向かった



「おお！速い！速いですな！」

やっぱりコルベールは喜んでいて  
だが一行はつかれたのか寝ている人が多かった

その頃ルイズと中川老人は話をしていた

「春奈のお爺様って  
すごく元気ですね」

「ッハハハ、ワシは軍で鍛えたからな！  
健康にも気をつかっておるし！泉重千代やジャンヌ・カルマンよ  
りも

長生きする自信あるぞ！」

二人とも長寿で有名な人間である

泉重千代は世界最後の江戸時代生まれであった  
享年120

カルマンは122歳と人間としては  
最高齢であった、これにより現在、男性のチャンピオンが泉、女性  
のチャンピオンが  
カルマンになった

「まあ、お爺様は長生きしそうですね  
頭の回転もいいですし」

それに、90代の彼はまだ腰も曲がっていない  
歳であんまり早くそして長くは無理だが走る事もできるという

ロクな病気にもならず近所では『超元気爺』とあだ名されている

しばらくして、京都に到着した

この日は京都の和風旅館に宿泊

ハルケギニアの人たちははじめて食べる本物の和食を

とてもおいしいと評価、さらに温泉もきもちよかったという

こうして旅の一日目は終わった

#### 4・東京の旅（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 5・京都！

二日目・

「おそいぞギーシュ」

「いやあ荷物を纏めるのが大変でねえ」

「零式輸送機が悲鳴をあげそうなほどだもな」

「ッハハハハ」

やっぱり一番おくれたのは

ギーシュだ、そりゃそうだ秋葉原で  
あんだけ買い物すれば…

一行はまず、高校の修学旅行では  
必ずいくであろう金閣や銀閣を訪れた

金閣・

「わあ、すごいですね、でもこれでしたらハルケギニアでも造れそ  
うです」

金閣寺はハルケギニアの人々に  
好評だったが銀閣寺は不評だった

どうも質素って感じがするらしい

しかし旧軍出身者は銀閣寺のほうがおちつきがあると評価

シエスタも先祖が先祖だけに銀閣のほうが気に入った

その後西本願寺にもいったりした  
京都はシエスタに好評だった

ゆっぱり日本人の血が流れているからだろうか

あちこち名所を回りあつという間に時間がすぎ、昼食を食べた後

本日のメインとも言うべき『梅小路蒸気機関車館』へ向かった  
ここでハルケギニアにはない鉄道というものを  
より知ってもらおうというのだ

梅小路蒸気機関車館 -

一番目をキラキラさせているのは  
コルベールだ

「すごい！蒸気機関で走る機関車が

もう退役しているなんて！」

「こつちでは私が今開発中だというのに！」

コルベール先生は、アルビオン戦役では

実戦で使われなかったが魔道追尾式の空対空ミサイル『空飛ぶ蛇く  
ん』

を開発した、それだけにある程度知識はある

「電気つていうのと内燃機関で動くものが

ほとんどでもう蒸気機関で走る車両がとつくのむかしに退役済み  
とは……」

「君達は軍事以外でも本当に進んでいるんだね」

ちなみに意外な人物が  
鉄道に一番詳しくった

「おお！動くとし聞いていたけど本当に動いてる！

『スワローエンゼル』美しい！」

そういつてカメラで写真をとるのは  
なんと春奈の妹の雪華だ

まだ両親がハワイに行く前のことだ  
父親は鉄道ファンだった

どちらかと言えばお父さんっ子だった雪華は  
影響されて鉄に目覚めたそうだ

現在家族でもっとも鉄道に詳しい  
実は京王線や山手線の人ごみの中、写真をこっそり撮っていたらしい

鉄道ファンといえば大きなカメラを持った  
男性を想像するだろうが最近はその子の鉄道ファンも珍しくない  
有名人としては豊岡真澄や木村裕子などがそうである

また、ある全駅下車達成を果たした人物の活動により  
レールクイーンなども存在するなど、女性の鉄道ファンは増えている  
もちろん、最近は国鉄車両が丁度退役、廃車になることが多く  
男性の鉄道ファンも増えている

ちなみに雪華の夢はJR、私鉄の全駅下車  
女の子代表としてやってみたいらしい

ちなみに春奈はどちらかといえば軍事に興味があった

爺ちゃんっ子だったのでよく戦争の話が聞かされたり兵器の話が聞かされたりしているうちにミリタリーに目覚めたりしてハルケギニアで義勇軍と出会った後も嫌がらずにちゃんと働いているのも

毎日兵器を見て毎日実在した軍人達と出会えるし

魔法とか貴族とかファンタジーみたいな世界でももしろいからである

現代日本では『ミリタリー』という趣味は

冷やかにされる為、学校では大っぴらにいつてはいないが同じく…というより春奈よりもミリタリーファンで

またお爺さんが日本海軍の中尉であった男子、平賀才人とは恋人同士とまではいれないがかなり仲がいい

最近、火曜日になるとデイ カバリーチャンネルでフューチャー エポンヤトツ 10などを爺さんと見ないと気がすまないらしい、最も最近は軍隊内にいるので毎日が趣味なのだが

ちなみに才人も視聴者である

雪華は嬉しそうである

ほかの車両の写真もとりまくった

一方アンリエッタは考えた

これをハルケギニアに走らせれば国はすこし潤うかもしれないと

梅小路の機関庫は

皆さんそれなりに楽しんだ

鉄道に興味の無い坂井や西澤は退屈そうだったが  
またこれを機にコルベールが  
鉄道に目覚めた、ハルケギニアでの実用化を  
目指して帰ったら研究することにしたそうだ

東海道本線 -

「ここは在来線も随分飛ばすんだな」

与謝野がつぶやいた

そして…雪華の頭に点火したのか

「ライバルの京阪や阪神もいますしね！

急カーブも少ないし！京都と大阪をアクセスするこの通称JR京都線は

利用客もかなり多いんですよ」

「へえ」

「まもなく高槻です」

どうやら普通列車は高槻に到着したらしいが  
大阪に宿泊するのでここで降りる必要はない

勢いよくドアが閉まり出発である

東京の列車で来たような

インバータのように静かではなかった

発車時にちよつと変わった音がしたあとガアアというモーターの音を上げて走る



これは国鉄201系という電車

日本のあちこちで活躍した

初の電機子チョップ制御（サイリスタチョップ制御）を採用し、電力回生ブレーキを装備した「省エネ電車」である

しかしコストが高いため、後の標準型通勤形電車は安価で旧来の抵抗制御をベース

とした界磁添加励磁制御方式を採用した205系に移行した

現在は老朽化が進み

東日本では新型に置き換えられ廃車になるものが増えてきたが

西日本では延命30N体質改善工事などの延命工事が行われ

今も活躍し大阪環状線では同じく延命工事を受けた103系などと共に活躍している

そして、今201系は高速で走行中の為

すさまじい音がする

「これは、昨日乗った東京の列車よりも  
すごい音がしますね」

コルベールがいった

「ちょっと古い車両なんです」

「いや、それでもすごい！これが古い車両なんて  
私は信じられません！」

しばらく列車に揺られていると  
すぐに大阪についた

「ここで大阪環状線に乗り換えて

弁天町まで向かいます、そこに本日宿泊予定のホテルがあります」

「えっ！？ 遠いじゃん！！ 日が暮れちゃうよ！？」

「いやあ、京都で名所回りすぎたし

あんまり大阪見るとこないのよ」

何回目だろうか

流石に皆鉄道の利用には慣れた

大阪環状線には103系や201系などの国鉄車両から  
223系などのJR化後の車両までいろいろ走っている

「そういえば、なんでこれ終点が出発地点の同じ名前なんですか？」

アンリエッタが与謝野に聞いた

「この大阪環状線は都市をぐるぐる回っているんですよ、山手線の  
ように」

「…」

自国であるトリスティンとの  
圧倒的な差に自身も圧倒された

「…私の国よりも…すべてで勝ってますね…この国…」

アンリエッタは自信を無くしたのだろうか

「いやあ、女王様の国、話を聞く限りワシの国よりも勝っている事があるぞ」

それは…

「愛国心、そして誇りじゃ」

中川老人はアンリエッタを説得した

「確かに技術や文明、国の組織や国民の教養など様々な面でトリスティンに勝っているじゃろう」

「ワシも話を聞いたただけなんじゃが

意見は違えどみんな愛国心らしいな」

「そして民族としての誇りも持っているみたいだ」

「しかし、現代の日本人はそんなものおいしいの状態じゃ…」

「表面綺麗に見えても裏では墮落しきっている…それが現代日本じゃ」

「だから貴女が今後政治を行う際に覚えておいてほしい事は誇りと愛国心を持って、形だけ綺麗な国はロクな国ではないぞ」

「そ…そうなんですか？」

「弁天町…弁天町です」

弁天町に到着したそうだ

下車したらそこはもう見慣れた広大な構内しかし駅によって微妙に雰囲気は違う

ホテル -

「うわお！」

今日は『和』ではなくどちらかと言えば『洋』だ

しかもバイキングときた

「ルイズ？昨日の和食とどっちがおいしいと思う？」

「うん、味的に私こっちのほうがあうかもしれないわ」

そういつてルイズが

むしゃついていたのはフランス料理だ

まあなんとなくわかる

トリステインは地名フランスのようだったり

人の名前もフランス人っぽい

貴族にもなると浩二も

フランス料理が珍しくは無い

## 5 ・京都！（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 6 ・ 平和（前書き）

本来昨日あげるべき話なのでしょうが  
一日遅れで…

## 6・平和

翌日 -

一同は新大阪駅へ向かった  
広島へ行くために

「ヒロシマってところにはなにがあるのかしら？」

ルイズはほかの日本の町のように  
綺麗な場所だろうと予想した  
それは今でこそ、広島は綺麗な町である  
一同はさすがに現代の鉄道に  
なれたのか、雪華とコルベール以外興味を示すものはほとんどい  
なくなつた

かれこれ1時間以上がかかり広島へ到着した

「ここが広島ですか」

シエスタは背伸びをした  
ほかの皆も長く列車にゆられていたのかくたびれていた

「とりあえずお好み焼きでもくいますかい」

そう言ったのは中川老人だ  
お好み焼きは好評だった

んで、食い終わった後

「あの、平和記念公園とは一体？」

浩二が中川老人に聞いた

「…貴方や、ほかの旧軍出身者には、特に見てもらいたい」

「戦局不利といえども、日本兵の精神は変わらなかった」

言葉の意味がわからない

浩二が知っているものよりもすつかり

真新しくなっている路面電車に乗り

しばらく列車に揺られていると

原爆ドーム前駅という所に到着、一同は下車した

平和記念公園という場所の目の前まで来たが

ここで与謝野は真剣な顔で警告した

「あの…これからご覧になる事はすべて事実であります、

ですがこのような人間が犯した愚を、ハルケギニアの人たちに

知ってもらい将来に役立つくれればと思います」

この時は誰も言葉の意味を理解できなかった

「ちょっと、曾爺ちゃん、中川さん達日本軍出身者に

見せるのはいいとして、ルイズさんやアンリエッタさんに見せる  
必要あるの？」

「…知っておいたほうがよいじゃろっ…」



中川老人こと中川浩二、実は弟の娘が広島に疎開して、被爆したという、また戦後、飛燕を造る途中なぜか手に入れた資料の中に核についてがあり、独自で研究、もちろん造ってはいないが威力の計算はできた

自分は陸軍の下士官だったが

やれば飛燕を製造ができた

…ハルケギニアにはもっとと沢山日本軍の軍人が入り込んでいるとも聞いた

…ということは原子爆弾が完成する日は近いと見ていた、それだけにここは見てもらいたかったという

入館すると、浩二は資料を読んだ

ハルケギニアの人は日本語を読めないからである

2時間ほど時間がたった後

一行の雰囲気は暗かった

特に、ハルケギニアから来た女性陣は今にも泣きそうだ

春奈もミリタリーファンではあるが

核ばかりは肯定できないという

そして、日本軍出身者は怒りを感じた

「…アメ公め…」

「罪もない民間人をこんだけアツサリと…しかも後遺症まで残る爆弾を造りやがって…」

特に田口は激しく怒った

「もし来世で前世の記憶を持ったまんま同じ時代に生まれ変わったら…ここはさせんぞアメ公…」

しかし素直に受け止める日本軍の軍人もいた

「仕方なかつ、敵は鬼畜だ、手を出したのが悪かつたな」

「国力が違いすぎる…」

「残念ながらアメリカは大日本帝国が勝てる相手ではなかつた」

そう、浩二だ、素直に敗北を認めた

「いやあ、しかし本当にすごい

人がここまで科学力を進歩させこんな事ができるなんて信じられないよ」

「ですが、これは真実です、コルベール先生はたしかこちらでいう学者さんなようなことをしてましたよね？」

「え？学者？」

「ですが、原子爆弾のような兵器だけはつくらないでください」

「まあ、そんなもの我々の技術では

とうてい造れないでしょうし、ここを見て造る気も失せましたよ」  
「それに我々は国防さえできればよいのです」

「でしたら、安心です」

その後は宮島にいった

現代人、日本兵はともかく他のメンバーは冴えない表情だった

## 6・平和（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

ちなみに今、登場を検討している兵器

味方：

6号戦車ティーゲル 61式戦車、駆逐艦「雪風」空母「隼鷹」  
ソードフィッシュ、九〇式艦上戦闘機  
超兵器でもない架空兵器

敵：（義勇軍が鹵獲運用する可能性もあり）

ソミアAS35 ルノーB1bis 米空母（未定）米戦艦（未定）

## 7・大日本帝国海軍

翌日、皆の表情は先日よりもよかった

雰囲気は回復しつつあった

この日はコルベールのリクエストにより『大和ミュージアム』へ向かった

ここには数々の資料や戦艦『大和』の10分の1スケールの模型があつたり

零戦62型や人間魚雷『回天』、その他日本海軍の魚雷や特殊潜航艇砲弾などが展示されている

「おおお！この戦艦はハルケギニアにもありませんよね！

すごいですよ！小さいですが本物とはまた違ったすごさです！」

「でもコルベール先生、これ60年以上前の船で

今の戦争には使い物になりませんよ」

春奈はつつこんだがコルベールの気持ちはかわらない

「いや、十分すごいです、これ一隻だけでも

ハルケギニアのこの国の海軍よりも強いでしょう」

「そんなのが今や二隻あるんですから

とんだおどろきです、おそらくトリステインの正規軍より強いでしょう」

興味津々のコルベール

春奈はちよっとミリタリーに関する知識が豊富なので

いろいろとコルベールに解説したりして盛り上がった  
あの二人親子としてなら仲良くやってけそうだと浩二が思うほどだ

その時、春奈の妹、最も鉄ちゃんな雪華が  
やってきた

「中川さん！ルイズさん！ちょっとそこに二人でたつて！」

「ん？なにかしら？」

二人は零式艦上戦闘機六二型の前に立たされた

カシヤツ

「な！？なにいまの！？」

ルイズはカメラに驚いたようだ

そういえばまだルイズにはカメラというものを  
教えていない

「ほら、撮れましたよ」

「おお！すごい！色がついている！」

浩二もまた驚いた

モノクロしか知らない浩二にとって  
カラーは新鮮だった

その頃、アンリエッタは中川老人、与謝野と共に行動していた  
ついでにギーシュもついてきたが

「ま…ま…ま…」

「まったくお前は荷物が多すぎなんだ？」

「…ここもやられたんですか？」

「ああ、アメリカ軍にな、これで日本海軍に残された  
大型艦艇はほぼ全滅した、日本海軍にはもはや水上作戦能力  
がなくなってしまったのじゃ」

「…悲惨ですね」

「でも、私昨日春奈さんに教科書っていう本を見せてくれたんです  
が、

「日本には憲法9条っていうのがあるじゃないですか」  
「あれ、私すごく感動しました」

たしかに日常が戦争のハルケギニアでは  
9条はかなり斬新なものかもしれない

「しかし日本は自衛隊という、防衛組織をもっておるぞ」

「えっ？憲法と書いてあることが違うじゃないですか？」

「そこが9条のミソじゃ、今は改正するか改正しないかで  
たまに議論になったりする、ワシは改正すべきだと思うのじゃ」

「な…なんでですか！？戦争しなくてもいいんですよ!？」

「まだ、人類は武器を持たなければ危険な状況にあるのじゃ」

現に付近の国からミサイルが飛んでくるかもしれないし」

「みさいる？」

「おっと、これは失礼、ミサイルとは…わかりやすく簡単にいえば  
セットさえすれば前線にいかないで、ボタンひとつで発射して  
敵の基地を攻撃する兵器じゃ」

「ひ…卑怯ですよそんな兵器！」

「卑怯も糞もないんじゃないよ、地球の戦争は」

「そ…そうなんですか…」

衝撃の事実をしり

アンリエッタは暗くなった

前線にいかなくても敵を攻撃できるシステムが  
この地球にあるなんて信じられないのだ

ほか、同じ頃シエスタも

表情が暗くなっていた

「…絶対生きて帰れない…ひどいですよ…」

回天を見ていた

「兵器事態がバンザイ突撃用とな…」

もはや終わってたな、軍は」

一方、浩二達は



「あの…坂井、西澤、もういいでしょうか？」

二人は零戦にとりついていてた

「おお！こいつは！普段乗っているのとは  
また違うタイプじゃないか！」

「ところどころ改良されているんですね」

ただし、零戦の後期タイプは  
無理な防弾、重武装化などで五二型でかなり速くなった速度が落ち  
運動性能も落ち航続距離も短くなっている

「…あの…貴方坂井さんじゃありませんか？」

「ん？ そうですが？」

「…嘘でしょ…本物なんですか？」

「そりゃあおめえ、俺は正真正銘坂井三郎ですよ」

近づいて来たのは大和ミュージアムの  
従業員である

「あ…あれ？西澤さんまで？なんで？どうして？」

たまたまその光景をみていた春奈は適当にごまかすべく  
駆けつけてきた

「さんのどうでもいいでしょ！用件は！？」

「は…春奈？どうした？」

「んもお、こんな事大つぴらに言えないでしょ

坂井さんも西澤さんもこの時代では死人なんですから」

「…それもそうだな」

「？」

ルイズは話についていけなかった

幸い春奈の必死な演技で

坂井は本人ではないと思われた

セーフである

その後、一行は広島に戻り

新幹線に乗る、そして新大阪へ戻った

今からホテルチェックインまで大阪見学だ

各自自由である

## 7・大日本帝国海軍（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 8・大阪へ旅行最終日

大阪で一時解散、ホテルチェックインまで自由行動である

ちなみに集合場所は天王寺駅、明日は一で空港へ向かう為  
関空快速が停車する駅の近くのホテルに宿泊したほうが  
早いという春奈の提案である

雪華はコルベールとアンリエッタを連れて  
弁天町駅付近にある交通科学博物館を訪れた

アンリエッタは今回この事で鉄道に興味を持つことになる  
まずアンリエッタとコルベールに自信をつけたのが『国鉄7100  
形蒸気機関車』である  
アンリエッタはメイジ達を使えばこれぐらいは複製は可能と考えた  
蒸気機関の再現に手間取るだろうが

しかしコルベールは今、蒸気機関を研究中であり  
本当に蒸気機関車の実用化を目指そうとしている

雪華はただ感激した  
写真をとったり資料を真剣に読んだり  
するだけであった

一方浩二とルイズ、田口にシエスタは大阪城へ行っていた

「わあ…すごいわねこれ」

昔の日本の武將は

一瞬にして輝きを手に入れ一瞬にして輝きを失う事が多かった  
ここで浩二は夏の日差しが照る中芝生をみて一句、披露した

「夏草や兵どもが夢の後」

「なにそれ？」

「一句」

どうみてもパクリである

「ああ！大佐盗作しましたね！」

「うるさい！古い人の俳句言ってなにが悪い！」

「でもここは東北じゃないですよ！」

「…きにするな」

その他も大阪の名所にいたりして楽しみ

一日が終わった、そして翌日、いよいよ旅の最終日だ

すでに乗りなれた列車に乗り

関西国際空港へ向かった

空港

窓から飛行機が見える

「すごい！これほど大きい物体が空を飛ぶなんて！  
なんてすごいんだ！地球最高だ！！」

コルベールはおおはしゃぎだ

変な人がいるって目で人々はコルベールを見た

「は…はずかしいですからやめてください！」

与謝野は注意した

だが原始人みたいに驚く人はまだいた

「プ…プロペラがない！！」

「どうなっているんだ！？」

「まさか…噂にはきいてましたが…ドイツで実用化されたという  
ジェットエンジンで動いているのでは？」

「ジェ…ジェット？」

「はい…メッサーシュミットがそれで戦闘機を造ったと…」

「貴方達もつるさいです」

与謝野は注意した

そして、飛行機に乗った

「うわああ…いつも見てる飛行機より大きいわね」  
「こんなの本当に飛ぶの？」

ルイズが聞いてきた

「俺に聞くな、まあ飛ぶんだろじゃないと  
旅客機として使えないじゃないか」

そしていよいよ離陸の時だ

すごい音をたてて旅客機は離陸態勢にはいった

「すごい！これ飛ぶの！？なあ飛ぶの！？」

ギーシュもはしゃぐ

気がついたら地面が離れていた

「と…飛んだアアア！！！！」

ギーシュが叫んだら

もちろん回りは一瞬ギーシュをみた

まあきにしないフリをするのが現代日本人だが

そして席の数の関係でとなりに座っていたルイズはつぶやいた

「うるさいわね…」

ルイズも飛ぶかはわからなかったが

多少の予想はついていた

いつも飛行機をみているからである

数時間のフライトで

羽田空港に着陸した

この飛行機の中での生活は

実に快適なものであった  
ちなみに、飛行機は危険な乗り物と思われているらしいが  
実は非常に安全な乗り物なのである  
最近では過去の事故の教訓や全体的な技術の向上などで  
事故の件数が減りしよっちゅう事故を起こす車などに比べてかなり  
安全である

羽田空港 -

「いやあ、実にすばらしい旅だった」

「あとはお土産ね」

そのために品川駅へ行く事に  
そこまで京急を使う

鉄道には乗りなれた一行だが  
モーター音に驚いた

「くるよ…これ2100形だから来るよ…」

プシュー

ドアが行きおいよくしまり  
出発のときがきた

ファ〜ソラシド…

「えっ!?!なにこの音!?音楽!?!」



「2100形はジーマンスのモーターを積んでて  
この独特な音は「ドレミファインバータ」なんてあだ名がされて  
るんだよ」

「N1000形も同じ音がするタイプがあるわ」

さすが雪華、詳しい

・  
・  
・  
・

品川 -

「じゃあ、ここに集合ですな

それまで好きなところへ」

…というわけで皆一斉に散った

なお皆さんがどこへ言ったかは不明だ

1人だけ予想できる人物がいる

萌え文化万歳！日本万歳！とか叫んでたりしたとかは秘密である

そして帰り -

「うつわ…ギーシュなによそれ？」

「すごい量だな…」

「ハハハ、新しいの買っちゃった」

「いやあ小説とかもいいねえ！挿絵がかわいいよ！」

トリスティンの貴族がこの短期間で日本のしかもオタク文化に  
馴染んだギーシュがすごい

「なんか僕らに似た人物が活躍する小説もあつたし！」

タイトル名『零の使い魔』ゼロが零になっただけである  
ただし登場キャラクターの名前が違ったりしている

例：ルイス アンリエツタン アルベール

「こ…これはひどい…」

全員あきれてた

その日の夕方、家にかえる事ができた  
これで5日間の旅は終了である

## 8 ・大阪へ旅行最終日（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

2・春奈の自宅へ(3)を読む前にこつちを！(前書き)

すみません！

まさか2が抜けているとは思いませんでした！

## 2・春奈の自宅へ(3)を読む前にこつちを!

その後、飛行機をしまってもらうなど  
いろいろ手伝ってくれた中川老人は自家用バスで  
自宅まで走った

ちなみに老人と春奈の家は隣である  
今回は中川家へ向かった

数十分後 -

「さあ、お茶しかありませんがどうぞ」

「ありがとうございます」

「春奈も遠慮せず飲みなさい」

「うん、ありがとう」

まず老人の目は  
浩二へ行った

「…ワシは君と二人で話したい、ちょっと来てくれるかね?」

「えっ?俺ですか?」

「…わかりました、じゃあルイズ、ちょっと行ってくる」

「うん」

老人に呼び出され

浩二は個室へ向かった。

わりと近代的な住宅である  
扉を閉め密室状態になった

「……」

そして老人は浩二を見つめた

「……間違いないな……貴方ワシの若い頃じゃろ？」

「お前、中川浩二って名前じゃないか？」

「……はい……」

「……そうか……なにがあったか知らんが  
やっぱりワシか」

「にしても随分顔色がいいな」

「ええ、わけがありました」

「ほう……」

浩二はすべてを老人の自分へ説明  
かれこれ30分が経った

「……なるほど、最近の過去未来とかの考えならありうる話だな」  
「たとえば過去へいってなにかをしても現代に戻ったらなにもかわ  
らない」

「なぜか、時代は進んでいるんだ、たとえば過去で麻 首相

首をとつても、今にもどつたら彼は生きている」

「…」

「君はそのハルケギニアに飛ばされたというワシのもう一つとも言える歴史を辿つたわけだ」

「…そういうことになりますね」

「今の階級は？」

「大佐です」

「そうか…偉くなったものだ」

「…ワシは終戦後に米兵に捕らえられたが、なんとか帰還できた、たまたまそいつはいい奴だな」

春奈の言った

通りの歴史を歩んだらしい

「こうして戦後の平和な世を生きた

最も冷戦とかもあり今も殺人事件とか汚職とかの事件が

多くて完全な平和とは言えない…ですがね」

「…ワシが、多分途中までワシの人生を歩んだ

お前さんなら知っているであろう、飛燕を造つた理由を知りたいか？」

「…はい」

別のルートを歩んだ未来の自分が

行った行動を詳しく知りたい  
その一心からはいと答えた

「ワシは1943年、トラックにいた、経験したな？」

「はい、トラックにいました」

「その時始めてみた時、衝撃を受けたんだ」

「飛燕を見た時、日本はドイツに追いついたと思った」

「…」

たしかに、ハルケギニアの浩二も

トラック島時代飛燕を見てドイツに追いついたと思った

「しかし戦局は悪化、結局兵員を補う為に名もなき島、ワシらは紺碧島と

呼んだ島に集められ死にそうになった、ワシは玉砕後も戦い続け  
1人生き残った」

「日本は所詮、武器もなけりや資源もなく精神力だけで戦っている  
事を実感した」

「しかし、ワシの頭から、飛燕の姿が離れなかった」

「白い期待…真つ赤に輝く日の丸…」

「なにを思ったのか戦後解禁されてから

地道に金をあつめつつ、子孫も残しながら飛燕を造っていった」

「時間をかけ…時間をかけ…完全に再現すべく  
機銃まで探した…」

「本来犯罪なのだが…まあみんな見逃してくれた」

「そして今年の6月…ついに三式戦闘機『飛燕』を完成させたのじ  
ゃ」



「そうですか…」

「いやあ思えば長い道のりじゃった、航空力学も勉強  
したし空気力学や連続体力学、流体力学などほかにも  
いろいろ勉強したわい！」

「でも初飛行の時は嬉しかった、今の高度な技術を使って  
製作したからボタン一つでエンジンはかかるし前線部隊がいつて  
たような

故障もない、109のようなキインとすごい音を出して飛んだ  
わい！」

「おめでとつございます」

「そりゃそうとさつき話してたら、結婚したんだって？  
おめでとつ、まあ気にせず生活してくれ」

「はい！」

「よし、戻ろうか」

「はい！」

その後、二人は部屋から出てきた

「なに話してたの？」

「ちよつとな」

適当にごまかしておいた

「さ、教科書とりについたら今夜は曾爺さんの家と私の家にわかれて宿泊よ」

「了解！」

そして、

高風家

「あ、お姉ちゃん！心配したんだよ」

「ごめんね、雪華ゆまか、ちょっといろいろあって」

「あれ？その人たちは？」

「うーんと、仲間だよ」

「？」

「ちょっと中学の時の教科書貸してね」

「なんで？」

「この人たちを再教育するの」

「さ…再教育って…」

「いやあ…夏休み暇なのよね、受験勉強も  
しなくていいから暇な時間が増えたわ」

「ダメよ、勉強しなかったら。この人たちみたいに  
ちよつと原始的になつちゃうわよ？」

ひどい言われようである

「そつだ、明日から日本中遊びに行くけど  
雪華も行く？」

「えっ？いいんだつたらついていくよ」

「決まりね」

こつして本来の任務を終え

明日からは遊びだ

その旅には案内として中川浩二（老人）や

近くに住む元航空自衛隊戦闘機パイロットの50歳にして

浩二爺さんと仲良しである与謝野智也元元2等空佐がついてくる

夜 -

皆、ぐつぐつと眠つた

誰が誰の家で寝たかはご想像にお任せする

2・春奈の自宅へ(3)を読む前に(つちを！)(後書き)

ご意見、感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 9・地球最終日…現地人の決断

夜 -

「…浩二君」

「ん？なんでしょうかお爺さん」

中川老人が話をかけてきた

「ワシは、ハルケギニアにいつてみたいんじゃ」

「えっ？」

「お主はそちらでがんばっているというのに  
同じ人物であるワシだけこんな所で余生を暇に過ごすのも悪いと  
思ってたな」

「いやあ、貴方は、戦いを行きぬいてようやく平和な時代で  
暮らせたんですし…そんなこと」

「頼むワシの友達の息子に航空機製造会社の社長、  
今の飛行機は時間が掛かるが第二次世界大戦レベルの飛行機なら  
週に10機ぐらいは造ってくれろぞ」  
「さらに金もある」

「そんな勧誘されてもですね…」

「それに…春奈が心配じゃ…」

「…」

「わかるじやろ…親も遠くへいったまんまで…」

「1人で戦争だらけの世界へ生かすのは危険じゃ」

「でも春奈はあの世界で暮らすといつておるんじやろ？」

「はい…」

「…ワシも…あなたの軍を手伝わせてくれ」

「武器弾薬の生産はおるか兵器の生産もワシが手がける

その辺の知識は豊富だし元技術者の知り合いもいる」

「それにワシらの一家全員軍人じゃ、ペリリユーで散ったワシの父もワシの息子も孫も、まあ春奈や雪華は軍人ではないがな」

浩二の父親はペリリユーで散った男である

近くにあった仏壇を見ると、中川州男の写真があった

中川州男、陸軍大佐、戦死後中将、最期はペリリユー島の守備隊長として

長い間米軍と戦い玉砕、自決した

この島の戦いは日米双方に多くの被害がでた

日本軍が見せた組織的抵抗は今後、硫黄島の戦いへと生かされた

「…わかりました、やっぱり孫が心配なんですな

そこまでいうなら、行きましようかハルケギニアに」

「よろしくのお」

中川老人もハルケギニアへ行く事にした

過去の自分のお手伝いの為

春奈が心配な為

「きいちゃった」

「ん？…ゆ…雪華！」

「私だけ置いてくつもり？ ひどいわね、ひとりぼっちになっちゃうじゃないの？」

「いいわよ、私も行く！聞いた話勉強しなくても生きてけそうだし！」

「それに前々からちょっときいたけどアンリエッタって人鉄道がほしいって

言ってたし、一番鉄道に詳しい私が手伝ってあげないとね！」

「…わかった、父や母には連絡を入れておく、

みんなで行こう」

なんか、雪華まできちゃうことになってしまった

翌日 -

まず春奈と雪華が高校へ行った

退学届けを出すために

「…久しぶりではないか、みんな心配したよ」

「…」

「やっぱりわけありみたいだな、まあ聞かないよ

それでなんの御用で？」

「退学届けを出しにきました」

「え？いいのですか!？」

「この先困りますよ!？」

「いいです、そういう知識要らない世界で生活しますので」

「は…はあ…」

春奈と雪華は退学届けを提出し  
正式に退学した

その帰り道

「あれ？春奈！」

「えっ？嘘！才人!？」

ここでやっとこさ登場であります  
原作『ゼロの使い魔』の主人公公平賀才人

ちなみに原作以上に二人は  
親しい関係なので二人は名前で呼びあっていた

「どこいったの？」

「うーん、異世界！」



「はい？もしかして映画でも見てたの？」

「違うよ」

春奈はすべてを話した

「うん、胡散臭いけどでも

それだけの設定考えられるだけですごいし…  
やっぱり本当なのかな？」

「そつよ！すごいわよ！」

魔法使える人いるし魔物みたいなのもいるしとにかくファイタジ  
ーな世界なのに

地球の兵器があるし実在した軍人さんまでいるし！」

「ほ…ほんとか！？」

「うん！」

才人は心をおどらせた

自分もいけば、趣味が会う人ばかりで  
毎日がおもしろいだろうと思った

実は好きである春奈と一緒にいられるし

「お…俺も行きたいな！」

「ええ！？でも才人はダメよ

両親が心配するでしょ！？」

「大丈夫！親にはだまっとくし

「そうだ今退学届けだしてきたの？」

「う…うん」

「じゃあ俺もいつてくるから」

「さ…才人!？」

数十分後 -

「ほ…ホントによかったの？」

「まあ、家の都合ってことでごまかしたよ」

「才人…すごいね…」

「こっちはこっちで才人もハルケギニアに行こうとした」

その後、集合場所である調布飛行場へ行くと…

「うわっ！ 曾お爺ちゃんにこの人たち!？」

「工場の従業員って設定じゃ!」

「みんな他界したワシの友達の息子で」

「自衛隊の兵器を生産する仕事についていた奴らじゃから詳しいぞ」  
「しかも!ワシの飛燕製作を手伝ってくれた」

「近所の仲間もよんだぞ!」

「さ…才人!？」

「えっ？爺ちゃん！」

そこにいたのは、才人の曾祖父、平賀才吉だ

「ワシこれから異世界いつてくるんじや

そうだ才人！そこには実在の軍人もおるらしいぞ！」

「どうじゃ！お前もいかんか？」

もちろん才吉はジョークのつもりでいった

絶対断るだろうと

もし行くとしても怒らず約束の『品物』を渡そうと思った

「…爺ちゃん…俺、行くよ」

「え？でも学校は？」

今ジョークで言ってみたんじやが」

「もう退学したよ、俺春奈からその、ハルケギニアの事を聞いてさ、なんでも兵器や実際に存在した軍人がいるんだって？俺も行ってみたいなと思ったんだ」

「…流石はワシの孫じゃ！よおし！

いい物をプレゼントしよう」

「浩二さんや、手伝ってくれ」

「はいはい」

中川老人がシャッターをあけると

そこには、開戦当初の色に塗られた零式艦上戦闘機二一型があった

「ええ！？零戦じゃないか！！」

「実はな！この浩二さんとの合作なんじゃ！  
お互いに飛行機を造った仲なんじゃ」

そう、飛燕の製作を才吉が手伝い、零戦二一型の製作を中川老人が  
手伝ったそうだ

「また新しいのが増えたわね……」

ルイズがあきれてみていた

「なんにしても、これで義勇軍の兵器不足が  
補われるな、兵士はそこから志願兵を集めればいいし」

「そうね、それにこれで政治について勉強できるね」

「そうだな」

夜 -

「……というワケじゃから、九三式中間練習機を10機、九九式艦上  
爆撃機5機頼むな」

「わかりました、おじさんも元気ですね」

「ツハハハ、ワシは120歳になっても死ぬ気にはならんぞ」

「じゃあ、来週な」

「はい」

震天飛行機という、中島飛行機より分裂し

規模を縮小しつつ営業し長野に本拠地を構える航空機製造会社だ

押本社長という、中川老人の友人の息子が経営するこの航空機製造会社なら

多少物騒な物でも容易に頼めるのだ

「…じゃあ、行きますか」

この日の夜、調布飛行場は多くの飛行機のエンジン音が轟いた

零式輸送機、零式艦上戦闘機、三式戦闘機『飛燕』そして小型機3

機…

よっぽど多くの技術者が

乗っているのだろう

次々と離陸してよく飛行機は月食の中に消えていった…

## 9 ・地球最終日…現地人の決断（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 10・ハルケギニアの異変 上

翌日・

「ふああ…あれ？」

「浩二…？」

「ん…ん…なんだ？」

「…そういえば俺ら飛行機の中で寝てたんだ」

外を見たらそこは、ダングルテール義勇軍基地だった  
一週間ぶりにみたらちよつと新鮮だった

そして本当に地球へ行ったんだと自覚した  
戦後も生き残り老人になった自分や春奈の妹、元航空自衛隊の与謝野  
才人や才吉、そして義勇軍に協力してくれる事になった皆さんがいた

さらにギーシュが買ったアニメのDVDや  
フィギュア、そして漫画本にゲーム、

いい匂いがする香水、女の子が好きそうな服

そして浩二が見てはいけないようなのだが下着類などが  
さらに地球のお菓子が山積み  
女の子たちのお土産だろう

はじっこには航空自衛隊のF-2やF-15、日本海軍の零戦や陸  
軍の隼の

模型があつた、絶対与謝野や坂井達だろう

かくいう浩二も時間を知りたい為時計とルイズの為に宝石を買ったそうだ

「よお、おはよう諸君！」

ギーシュがやってきた

「やあ、荷物とりにきたんだ」

「日本最高！来週誰か連れてってくれよお」

一人でいけよと思った

ギーシュはとて日本を気に入ったみたいだが

浩二は違った、180度ぐらい違う未来の日本を見て自分がなじめる世界ではないと感じた

「…そうだルイズ」

「なに？」

「これ、日本で買ったものだ」

「うそ！？綺麗じゃないの!？」

「こんなのよっぽどの貴族じゃないともってないわ」

そもそもトリスティンにこれほど良質な宝石はない

「ありがとう」

笑顔でルイズはお礼を言った



なおこの日より春奈やその他の現代人のご指導の元  
政治についての勉強が開始された

「はい、中川さんここ読んで」

「えつと…このような対立や争いを解決する為にルールを定め  
解決に導く事を広い意味で政治と読んでいます…」

本当に無知な彼らの為に

本当に基礎から勉強するのだった

ただし本があつて教えてくれる人がいれば

浩二の飲み込みは早かった

「流石、ペリリユーで戦つた中川州男の息子ね」

春奈も素直に褒めた

よく日本人は勤勉といわれるが浩二がそうだろう

…まあペリリユーの中川は関係ないと思うが

ルイズも魔法は使えなくても元々は頭がよい

実技試験で失敗するだけで筆記試験では常に上位だった

そんな感じで毎日熱心に勉強した

ところが一週間が経つたある日の事だ

浩二とルイズが丁度勉強している頃 -

ガチャッ

部屋の扉が勢いよく開けられた

そこにはトリスティンの兵士がいた

「ミス・ヴァリエール様！中川男爵！アンリエッタ女王様がお呼びであります！」

「えっ？」

「重要な御前会議があるとの事です」

「そうか、わかった、直ぐに向かおう」

「春奈、すまないが、用事ができたので」

「ええ、お仕事は断れませんしね」

毎度お馴染みドイツ軍将校の軍服に、数々の勲章をつけ男爵の証であるマントをつけて九五式小型乗用車こと『くろがね』に乗り込んだ

「あ、まってください！」

勢いよく走るくろがねを

追おうと兵士も馬で後を追うが馬が追いつける相手ではなかった

「あゝあ、どうせならキューベルワーゲンに乗りたかった」

「なんでよ？てかなにそれ？」

「ドイツの軍用車だよ、この服だったら絶対キューベルのほつが似合う」

たしかに日本製のくるがねよりもドイツ製の  
キューベルのほうが服装的に似合うし  
性能もキューベルのほうが上だ

数時間で、トリスタニアの街に到着  
美しいこの街の中をくるがねは走っていった  
道が狭いのでクラクションを鳴らしながら走る  
しかしトリスタニアの人々は物好きで  
男爵と代王の乗る自走する馬こたくろがねを一目  
見ようと暴動が起きる有様だ

王城 -

キィイツ

「やっぱり馬より速いわね

もうすこし乗り心地よかったですらいいのね」

「そりゃあ、ちょっと無理な注文かな」

二人は多くの兵士に見守られながら入城した  
アンリエッタがこうしろといったのである  
暗殺されたら困るからだ

会議室の扉をあければ、アンリエッタのほかのも  
銃士隊のアニエスや魔法学院の学院長、オスマン  
ほかにはマザリー二枢機卿、義勇軍総司令官の山下総帥に現アルビ  
オン代王ロンメル元帥などがいた

「女王様、ただいま参りました」

礼儀正しく浩二は挨拶する

代王であるルイズはともかく自分が呼び出された理由がわからない

10 ハルケギニアの異変 上（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 11・ハルケギニアの異変 下

「あの、会議の前に質問したいのですが？」

「なんででしょう？」

「トリステインの代王であるルイズはともかく、何故自分まで？」

「だって、ルイズの婚約者ですもの」

それだけかいと思った

今回のお代はガリアやゲルマニアの話らしい  
どうもこの二国とは関係が悪化しているという

「私は知っています、ガリアはレコン・キスタを  
支援していたと」

そういったのはアニエスだ

確かに義勇軍情報部やトリステインに新設された情報師団が  
それらの事実をキャッチしている

ガリアはまちがいなく、レコン・キスタを押ししていた

問題はゲルマニアだ、何故ゲルマニアとの  
関係も悪化しているのだろうか

アニエスは情報部に仲のいい女の子がいる為

即座にそういった情報を提供してくれるので重宝されている

そのアニエスがまた言った

「なんでも皇帝が暗殺されたようです」

「つまり、今は…？」

「一応、帝政という制度は残していますが  
新皇帝は自らを指導者兼首相と呼んでおります」

浩二や山下、ロンメルには似たような  
人物を頭に浮かべた

「ゲルマニアの人々は皇帝というより総統と呼んでいますが…」

まさかとは思った

まさか、一番厄介な奴がハルケギニアに飛ばされてきたのかと

「それ以降、彼は優れた政策を演説で国民に伝え  
前皇帝と違ってかなりの支持率を得ているとの事です」

「ですが、それだけではトリステインと敵対する理由はありません  
ぞ」

つとオスマン学院長がつつこんだ

アニエスは追撃するかのように述べた

「確かにこれだけなら…ですが情報部はその政策の  
一部を入手したというのです」

アニエスが言うに、その総統という人物は

6年前にハルケギニア入りして以来ずっと反乱を企んでいたらしく  
そして今、『総統』に就任したという

これだけでも地球人はその人物が誰なのか安易に予想ができた  
6年の間にその総統は勉強したのかハルケギニアの歴史についても  
詳しいらく

ゲルマニアがかつて行った大戦争、その目的は達成されなかった  
だが民族の誇りとして、生き残る為の生存圏を確保すべく  
その戦いを始めようというのだ

ここでなんの事かを説明しよう  
もちろんこの小説だけの勝手な設定である

ゲルマニアは帝政というわりに  
作中では帝国らしく他国へ侵攻していない  
それは現在のゲルマニアは全盛期と比べて弱体であるからだ  
400年ほど前にゲルマニアは生存戦争という、生存圏の拡大を目  
指した

大戦争を引き起こし、トリステイン王国やクルデンホルフ大公国、  
アルビオン王国へ  
侵攻し連戦連勝、勝利を収めていった

トリステイン・クルデンホルフ・アルビオンはガリアに亡命政権を  
つくり

当時は友好国であったガリア、ロマリアの大国に期待をかけた

そしてハルケギニアの運命を決める大戦争が勃発

これはハルケギニア大戦と呼ばれる、ハルケギニア西部全域を巻き  
込んだ



大戦争になった、しかし国力に物をいわしたガリア、さらにロマリアの協力でなんとかゲルマニアに勝利しハルケギニアは今と同じ、そう、元に戻った

その後、ゲルマニアはしばらく国力を回復できず

戦争をしなかったがわりと最近になって、今度は東部を目指しモスクワ大公国へ侵攻

この時モスクワは全盛期でエルフに侵攻されても押し返すほどの軍事力を持っていた

そのモスクワ大公国は見事ゲルマニアの侵攻を阻止し、それ以降ゲルマニアは

皇帝の無能もあり急速に国力を落す

だがモスクワも国力を落し、現在でも強い軍隊はあるものの財政的な問題に悩んでいる

両国の国力が急に落ちたのも、この両国の戦争が10年にも渡って行われたからである

そのため、ハルケギニアの戦争ではかつてない人数が犠牲になった

その、ゲルマニアの新皇帝に就任した男は

かつての大戦をまた行おうとしている

さらに、ゲルマニア民族以外は自分らよりも下等な生き物を見下している

政策の中に正式に『生存圏確保』つまり生存圏の拡大の為の戦争を行うと

いうのがあるゲルマニアとは近い時期戦争がある

さらに今回敗ればガリアにも亡命できない

ガリアも今や仮想敵国である

戦争を遊びとして楽しむジョゼフが王様じゃあ終わっているも同然  
このままではトリステインは最悪の状況になる

ガリアとゲルマニア、この二国を同時に相手しなければならなくなる  
もちろんトリステインにそんな国力はない  
唯一の頼みである義勇軍もそれほど多くの相手と戦える戦力は流石  
にない

「戦争の回避は？」

「はい、現在外交でなんとか解決しようとしています  
しかし、関係はますます悪化していく一方で……」

「なにかいい策はありますか？」

「そんなこと……きかれましても……」

情報部がキャッチした情報

それとガリア・ゲルマニアとの関係悪化  
異変とはこのことであろうか

突然発覚した事実にみんな驚くほかなかった

そこで浩二が口を出した

「あの、もしです、もし戦争になったんでしたら  
どうするんですか？」

「私は、出来れば外交で解決してもらいたいのですが  
戦争になった場合は？」

「そうですね、女王様、外交も大事ですがもし戦争になったら場合の

対策も今のうちにたてましょ！」

ルイズもいった

二人はわかっている

外交で解決できる問題だろうか

ガリアはなんとかなるかもしれない

しかしゲルマニアは侵攻を正式に予定しているというのだ

すくなくともゲルマニアとの戦争は避けられない

アンリエッタは悩んだ

どちらか一国でも、どのみち大国、トリステイン一国で解決できる問題ではないのだ

かといってロマリアにはあまり頼りたくもない、クルデンホルフは仲間にした所で使い物になるかわからない

そこで、マザリーニ枢機卿がいきなり喋りだした

「あの、私より一言よろしいですか？」

「枢機卿、どうぞ」

「はい、この問題はどう考えても、外交で解決できるとは思えません」

なんと、浩二やルイズと同じ考えを持つ人が  
こんな所にいた

「ガリアはともかく、ゲルマニアとは必ず戦争になるでしょう」

「しかし一国ではとても相手できません、同盟国を増やすべきです」  
現在、仮独立ではあるが、アルビオンとの同盟はしている  
アルビオンもあれからロンメルの優れた政策で  
だいぶ復興してきている、しかしアルビオン一国では同盟国として  
も力不足だ

「そうね…どこか現在中立でいい国が…」

候補があがらない

またマザリーニが手を挙げた

「モスクワ大公国なんてどうでしょうか？」

距離はありますし、陸上かに行くのは難しいですが  
海上からの移動は可能とわかりましたし」

「…つまり枢機卿、なにを？」

「はい、まずトリステインは、資源が枯渇するでしょうね

しかしモスクワには大量の資源があります、この資源を買いまし  
よう」

「逆にこちらは、義勇軍の技術を提供するのです」

「それに聞く話ではモスクワは協力的な軍隊を

もっているといえます、義勇軍のような装備になったらさぞお強  
い事か、

しかも中立です、どうでしょうか？」

マザリーニ枢機卿は

現在中立国であるモスクワ大公国と正式に国交を正常化し同盟を結  
ぶという

モスクワへの行きかたはもう既にわかっている

しかも、ほとんど知られていない東の世界を調べるのには丁度よい  
なにより、今は国力を落しているとはいえかつてガリア、ゲルマニ  
アと肩を

並べた大国である、味方にすることにこしたことはない

その後の多数決にて

モスクワ大公国と国交を結ぶ事には賛成となった

戦争回避がほぼ不可能であるゲルマニアとの決戦に備えつつ

外交面ではモスクワと有効的に、ガリアとも戦争を避ける為に

はたして、トリステインはこの後どうなるのやら

## 11・ハルケギニアの異変 下（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

総統の正体はそのうち明らかになりますが  
もう現時点でもバレバレな気がします…

## 12・モスクワ大公国へ

翌日より、モスクワへ使節団を送る  
計画が開始された

一方ガリアとの関係は悪化の一方だ  
ゲルマニアもいつ宣戦布告してくるかわからない

そんな最悪の状況の中の使節団である  
さらに翌日、使節団のメンバーが編成された

まず、モスクワ大公国よりきたジューコフが団長である  
ほかアンリエッタから指名されたのはルイズと浩二、  
コルベール、そして重臣マザリーニ枢機卿だ

一行は『大和』へ乗り込む

この戦艦なら以前もモスクワにいったことがあるので怪しまれない

「ルイズ、行くぞ」

「うん」

最後にルイズが大和に乗り込み  
いよいよ出航である

数日に渡る航海が始まった

その間は、海軍の兵士達は整備をしたり  
使節団の5人は会議をしたりだらーとすごしたりしていた

会議室

「首都モスクワの中央に大公の住む宮殿がある」

「現在の大公はウラディミール・モスクワスキーという人物です」

「どんな人物で？」

浩二はきいた

「50代後半の男性で口元の白い髭が特徴的な大柄な男である」

「ちなみに、この世界のほとんどの国とは違い、立憲君主制を採用している国です」

「りっ…立憲君主制ですと？」

浩二は驚いた

今まで見たなかで立憲君主制を採用している国家などハルケギニアではみたことないのである

「な…なによ立憲君主制って？」

「世襲あるいは選挙制の君主を元首とする君主制をとるが、君主の持つ権力が憲法によって制限されている政体です」

そんなのを採用している国、きいた事がないルイズは戸惑った、

現在のモスクワの政策はなんといっても『財政再建』である  
情報部の情報によれば産業革命がおこり蒸気機関で動く船があった  
りする

流石に20世紀の兵器を開発したり整備する技術はない



だとしたらモスクワ軍事博物館にある兵器を運用している  
19世紀初頭レベルの工業力がありそれで造った製品を他国へ輸出  
したり

してなんとか国を持たせているのがモスクワの現状だ

それから数日後、首都モスクワが見えてきた

操縦室 -

「いよいよ…ですね」

「使節団の皆さんを安全に上陸させなければ…ですね」

「提督！恐らくモスクワのものと思われませんが！  
海軍がこちらに向かってきています！」

「なんですと!?!」

カタパルト -

「コンタック！」

「草加少佐、偵察、がんばってこいよ」

「はい！」

草加少佐と後方に渡辺中尉の乗る零式水上観測機が  
カタパルトより発艦した

数分後 -

「モスクワ海軍は10隻でこちらに向かっている、  
こちらを警戒しているようです」

大和 -

「よし、呼びかけようか」

モスクワ海軍へ

敵ではないと知らせるべく  
彼らは行動した

「モスクワ海軍へ告ぐ！我々はあなた方の国と友好関係を築きたい  
トリステイン王国からの使節団であり敵ではない」

モスクワ艦 -

「…敵じゃあないらしいですが？  
提督、どうされます？」

「…まさか…あの軍艦旗…」  
「…そうだ！廃館した軍事博物館の兵器を購入  
していった奴らだ！大丈夫だ敵ではない！」

港 -

モスクワ海軍の軍人は  
敬礼をした、こちらも敬礼を返す  
見たところ、ロシアの海軍と同じような感じだ

「私は、モスクワ海軍中将のシャミール・モロトフという者です」

「先ほどは失礼いたしました」

「いえ、こちらこそ連絡無しで」

「さて、使節団とってましたね？」

「…そういえば貴方はジューコフさんじゃありませんか？」

「…久しぶりですな」

「今どうされているのですか？」

「はい、こちらの義勇軍の軍人として」

「なるほど、それで生計をたてているんですね、

それで本題ですがどのような御用で？」

ここでジューコフはすべてを話し

交渉に入る

「なるほど…では、大公の宮殿に向かいますよう」

モトロフに案内され

歩く事15分、豪華つてほどでもないが雰囲気は  
でている宮殿に到着した

「この宮殿に大公がお住まいになられ  
また公国議会も存在します」

ハルケギニアの中でも大変近代的な国家である

「しばらくその場で待っていなさい」

そう言い残しモトロフは警備員に敬礼  
中に入っけていった

「…なんか…寒いわね…」

「あたりまえだ…ここはただでさえ寒いんだ  
冬になると地獄だぞ？」

浩二とルイズが雑談をしていると  
モトロフが戻ってきた

「大公自らが使節団の皆様にお会いしたい模様です」  
「どうぞ」

なんと、大公自らが  
使節団の皆と面会を希望したのである  
いったいどんな人物なのだろうか？

宮殿の中はたいして豪華ではない  
本当にお金がないみたいだ  
ただし、これでも一時期よりは裕福になったという  
現大公と現首相、そのほかの国会議員のおかげである

5人が待機する部屋に  
1人の男が入ってきた

スーツを着用したその男、一瞬首相のように見えたが

「トリステインという、わざわざ遠い所からはるばる、我が国との友好関係を築くべくこられた皆様、私がモスクワ大公国、ウラディミール・モスクワスキーであります」

「ええ！？大公！？」

「ルイズ、失礼だろ」

あまりにも質素な格好をしている大公にルイズは思わず大声を上げてしまった

「もしや？質素だと？ はあ、大公家ですらお金があまりないので…」

「それに、あんまり派手ですと国民からも嫌われますしね」

ある意味正論である

一時間にも及ぶ話し合いが続いた  
そして…

大公とジューコフは握手、国交を正常化させ  
来週より貿易を行う事が決まった  
さらに来週軍事同盟も結ばれる事になり  
ゲルマニア、及びガリアにトリステインが宣戦布告をされたら  
支援したり共に戦ってくれるという

ちなみにコルトM1851レベルの拳銃なら  
製造可能である、なぜ構造が簡単なAK小銃の使い方がわからなか

ったのかは  
不明であるが、すくなくともハルケギニアのどの国よりも先進的で  
ある

その後、使節団は帰国、この事をアンリエッタに伝えたと  
彼女はよろこんだという

## 12・モスクワ大公国へ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

なお本日、北海道在住である私は千歳の航空祭に  
いって参りました、数々の機体が表示され自衛隊のみならず  
アメリカ空軍の方々もいらっしやり盛り上がりを見せました。  
そこで終戦時21歳だったという元海軍飛行兵の老人に話を聞くこ  
とができました。

老人は1943年、ラバウルに配属となり激戦を生き抜きました。  
体には今も銃弾の後が残っていました。

戦いの激しさがよくわかりました。

長くなるのでここでは割愛いたしますがいろいろな  
体験を語ってくれて、とても勉強になりました。

今後も、お元気で、そして今のうちに若い人たちへ  
体験を伝えていってほしいと心から思います。

それから、ありがとうございました。

### 13・航空母艦

一週間が経過したある日、同盟が結ばれた

また九三式中間練習機10機、九九式艦上爆撃機5機が届いた

さらに翌週、始めてモスクワから製品を輸入

かなりレトロだがそれでもハルケギニアの火縄銃やマスケット銃よりも

質のいい拳銃が100丁届いた

義勇軍はガリアやゲルマニアとの戦争に備えていた

一方、ラ・ロシエールの工場にて手作業で造られた九五式軽戦車2両が

ダンゲルテールの基地に届いた

ほか、基礎訓練を終えた50名の歩兵がやってきた

規模的に一個小隊レベルだ

ただし装備品は用意できなかった

日本軍のものよりもお粗末なモスクワ製拳銃が主力装備となった

「中川大佐、約束通り戦車2両、歩兵50名をここに配備しました」

「そうか」

「どうした？これほどの軍がきて嬉しくないのですか？」



「ああ、ハルケギニアの軍事バランスをぶっ壊すようだな」

「…そうですか…ですかすくなくとも大国ゲルマニアとの戦争は近いと言う話ですし…仕方ないでしょう」

「…それともう一つ、三日後にモスクワ陸軍と共同演習が予定されています」

「そうか、それまでに恥をかかないように訓練をしないと頼むぞ歩兵の連隊長」

「ツハハハ、連隊長って、中川大佐も戦車連隊の連隊長ではありませんか」

「まあもつとも士官不足で代用に中佐である私が…って話ですがね」

そういったのはこっちに配属になった橘中佐である

本日より厳しい訓練が行われた

## 第二步兵連隊

「諸君らは！学校を卒業したばかりの新米であるが！

兵員不足により3日後のモスクワ陸軍との共同演習に参加してもらう！」

「装備はモスクワ陸軍と同等であるが！質ではベテランであるモスクワ軍のほうが上である！」

「こちらも恥をかくわけにはいかない！

3日間！鬼のような訓練に耐えろ！  
耐えられたら特別に一階級昇進だ！」

「おおおお！！！！」

若い兵士達の士気は高い

本当に鬼のような訓練だったが全員3日間耐える事ができた

一方第一戦車連隊 -

「諸君らは、アルビオン戦役はおろか大東亜戦争にも参加したベテランである」

「この世界では敵勢力が戦車を持つことはまずない  
しかし戦車でいかに歩兵を支援するかが勝負の分かれ目  
気を抜かず、いつもどおり訓練してくれたまえ」

「はい！」

戦車連隊の訓練は

歩兵連隊に比べて優しかった

そんな調子で3日後が訪れ、モスクワ陸軍が降りてきた

「諸君ら、モスクワ陸軍の入国を心より歓迎する」

その頃、海軍は

伊勢が海上警備を行っていた

「提督、あそこ」

「ん？」

山口らはなにか巨大なものが浮いているのを  
発見した

「船だろうか？」

「さ…さあ…？」

山口は偵察に行くように命令、零式水上偵察機がカタパルトより発艦した

「コンターック！」

バババ…

整備状況がよいので

エンジンは快調に動いた

零式水偵が数分飛行すると

「こちら偵察機！…空母です！」

「空母！？人は！？」

「確認できません！」

「もっと近寄せ」

「はい」

零式水偵はギリギリまで近寄る人がいた、だが手を振っている、なぜだろうか？

その後、調査団を派遣した

一応、軍はこれを押収した

後にこれは空母「隼鷹」である事が判明した

搭乗員もほとんど生きていた

「我々は、不足する航空機を輸送中でしたが

霧に飲み込まれ気がついたらここへ、燃料もつき航行不能状態です」

「そうですか…」

ずらつと見たところ、零式艦上戦闘機2機、九七式艦上攻撃機3機、九九式艦上爆撃機2機

輸送を終えたのか、搭載している艦載機は少ない

「燃料なら提供できますよ」

「本当ですか？」

「ええ」

自ら後部にのりこまできて交渉に出た山口艦長

その結果、燃料と弾薬さえ補給できればかまわないということでもOKだった

しかしハルケギニアの主な戦場となるのは『陸』

折角配備した2隻の戦艦もほとんど活躍することができなく  
存在意義が疑われた、しかし…この後、隼鷹が約にたつとは誰も予  
想できなかつた

### 13・航空母艦（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ  
なお、あの角田氏も登場予定

#### 14・ヨルムンガント（前書き）

このあたりから原作読んだ事がありませんorz

その為ヨルムンガントの防御力がどれほどか詳しくはわかりません。

∴がアニメを見るかぎり37mm戦車砲では貫けそうじゃありませんね

## 14・ヨルムンガント

あきつ丸は存在意義が見つからなかった  
こんな船があっても、上陸作戦を行う予定がないので  
使い道がない、第一敵国は陸続きである

中川家 -

「…というわけなんです？ なにかに使えますかね？」

山口は浩二に相談した

「ん〜、万が一の場合は上陸用舟艇もありますし  
戦闘には約に立つのでは？」

「ひとまずスペースはあるので輸送船にでもつかったらどうでしょうか？」

「それはそうですね、輸送ならば戦艦よりは約に立ちそうですね  
わかりました」

ひとまずあきつ丸は輸送船として使うことになった  
実戦で使えるかはまだ疑問であるが

本日の浩二は陸軍基地を視察した  
その後、自らも連隊長として  
戦車隊の訓練を行った

もちろん自身も戦車に乗って



「撃ち方始め！」

浩二の戦車連隊はかなりの  
命中率を誇る

機甲部隊としてはハルケギニア最強ではないだろうか

翌日 -

「大佐殿、ラ・ロシエールより電報が」

「ん？読め」

「はい、未確認飛行物体ダングルテールノ方ニ飛行セリ…なんでし  
ようか？」

「さ…さあ？」

この時浩二は軍部は  
頭がおかしくなったと思った

だがそんな考えも  
吹き飛ぶ事になる

いつもと変わらぬ日々を送るある日

ドオン！

「なに！？いまの！？」

すごい音と同時にルイズが  
反応した、浩二は外にでてみると…

「な…なんじゃありゃ！」

「ええ！？ちよつとなによこれ！！」

二人が見たものはとてつもなく  
巨大な物体だ

「ゴーレム…ともまた違うな…」

「ゴーレムなんてそんな安いものじゃないわよ！」

「何者だ貴様は！？」

その塊の上には人が乗っていた  
歩兵連隊もかけつけた

その人物を目撃したことある人物もいた

「…貴様！まさか！ハヴィランド宮殿にいた女！」

「おやおや！懐かしい人ね！あんときは他人のふりしたけど  
そうよ！私はシコン・キスタにご奉仕していたのよ！」

「中井曹長！？あいつを知っているのですか！？」

「はい！名前は知りませんが！以前宮殿内で捕らえて  
クロムウエルの居場所を聞きだして解放したものです！」

「なに！？中井！何故解放した！？」

「はっ！アルビオンの下士官かと思ひまして  
捕虜にするのも大変ですので！」

「まあ、その時はレコン・キスタにガリアが関与  
しているとはわからなかったし」

「とにかく今はあの巨人みたいなのをどうするかだ！」

「その前に！あんなにしにきたのよ！」

「そんなの…決まってるじゃない？」

「アンタ達義勇軍とやらの実力を試しに来たのよ！」

「このヨルムンガントに勝てるかしら！？」

突然の出来事であった

ガリアのシエフィールドが

『ヨルムンガント』という謎の兵器（？）を  
駆使して義勇軍に戦いを挑んできた

「撃て！」

橘中佐が指揮する

歩兵連隊の兵士達が一斉に射撃を開始

しかしヨルムンガントはすべてを弾いた

「ッハハハ！銃如きでヨルムンガントは倒されないわ！」

「浩二！」

「ルイズ！逃げる！ここは我々に任せる！」

「でも！」

「奴は並大抵の攻撃では倒せない！」

浩二は八号などの戦車がある方向へかけていった  
その時、空からプロペラ機の音が

零戦二一型が2機、おそらく坂井と才人だ

「平賀君！お前は左へ！」

「わかりました坂井少尉！」

手のうちようがない歩兵達は  
ひたすら航空隊の活躍に賭けた

だが…

ダダダ…

「馬鹿な…20ミリでも貫通できない！」

アニメにて88ミリ高射砲の砲撃にも耐えた  
ヨルムンガント、20ミリ機銃で倒せる相手じゃない

「航空機じゃ撃退不能だ、とりあえず陸軍に任せて帰投しよう」

「はい！」

航空機の撤退と共に

エンジン音とキュラキュラとキャタピラの音をならし

この基地で最も攻撃力が高いだろう戦車隊がやってきた

中川連隊長の八号と九七式中戦車の5両だ

「恐れる事はない！相手はシャーマンじゃない！」

第二次世界大戦では、M3軽戦車やM4中戦車などは

ヨーロッパにてドイツ軍戦車隊に大苦戦した

物量作戦でなんとか勝利を収める事が出来たが

ただし太平洋では戦車というものを軽視した日本の

貧弱な戦車を相手に有利に戦う事ができた

浩二は少なくともヨルムンガントはシャーマンよりは丈夫でない

精々M3軽戦車レベルと予想し、八号では難しいが47ミリ砲搭載  
のチハ改なら

抵抗は可能と考えた

「撃ち方始め！」

37ミリ砲、47ミリ砲を備える

軽・中戦車計6両が報告を受け一斉に射撃を開始する

ヨルムンガントは装甲されていると予想した浩二は徹甲弾を撃たせた

ただし元日本兵たちは今までの教訓から  
一撃撃破は不可能だと思った  
弾は次々と装填され戦車による射撃は続いた

日ごろの訓練の成果か命中精度は高い、ほぼ同じ位置に  
かなりの高確率で弾を当てた

だが…

「嘘だろ…貫通できないだど!?!」

「浩二!」

こっちにルイズが走ってきた

「さっき!なんかが!きつとあれカウンターが鎧にかけられている  
のよ!」

「カ…カウンターだど?」

ティーガーの88ミリの火力に敗れたカウンターだが  
シャーマンなどティーガーに一撃で撃破された戦車の装甲を貫通さ  
せる

ことが難しい日本の戦車の戦車砲の破壊力ではカウンターで弾ける  
威力内であった

「きつとこの戦車の大砲はあの巨人の

カウンターで弾けるレベルの破壊力しかないのよ!」

「そつだ！後ろだ！普通戦車など装甲してある兵器は  
後方か上部の装甲は薄いはずだ！」

そつである

たとえば戦車、最大装甲が100ミリだとする  
前、後ろ、横、上、下、全部が100ミリというわけではない  
たとえば前が100ミリなら横は80ミリ、後ろは50ミリくらい  
で上にかぎっては20ミリあればよい  
満遍なく装甲が正面と同じだったら戦車は重くて動かない  
動いてもまあ運用できないだろう

「うまく回りこめる？」

「さあ、敵は人型だしくるくる回る機動力は  
こちらより上だろう、誰か時間を稼いでくれれば後ろに回りこめ  
る」

「そこか包囲するか、もっと接近するか、しかしそれは危険すぎる

…」

「わかつたわ！私が虚無で！」

「無茶を言つな！失敗したら！お前が死ぬ！」

「なあにもめてるのかしら？」

突然上から声が聞こえた

女性だ

そこにやってきたのはガリアのタバサとゲルマニアのキュルケだ

「ちょ…アンタ達!？」

「冷たいわね、助けに来たのに」

「キュルケはともかく、タバサはいいの!？」

「相手はガリアだよ!？」

「問題ない」

「やめさせにきた」

「そうよ、最近ガリアやゲルマニアとトリステインが不仲だった  
うけど」

「ガリアのジョゼフもゲルマニアのヒトラーもロクなやつじゃない  
でしょお?」

「それぐらいだったら私たちトリステインに立って戦うわ?」

「ヒトラー…やはり反乱でゲルマニアの元首となった  
人物はヒトラーか!」

「そうだけど?あんた知ってるの?」

「ゲルマニア人のキュルケの口からヒトラーという言葉がでた  
浩二の予想通りゲルマニアの『総統』のような人物はヒトラーであ  
った」

「どうやってハルケギニアに入り込んだかはわからないが  
浩二やその話をきいていた兵士達は思った」

(ヒトラーが敵だとはなんて厄介な事だ)



だが…ヒトラーの事は後回しだ  
まず目の前の敵を倒すべし

#### 14・ヨルムンガント（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

次回は46 糞砲が火を噴く…かも

15・46cm vs 爆発

キュルケとタバサの援軍がきてくれた  
彼女たちは時間を稼いでくれるという

3両3両に別れヨルムンガントの後ろへ回りこもうとした

作戦はすぐに開始された

タバサとキュルケが

それぞれ得意とする魔法で立ち向かう

しかしヨルムンガントのカウンター  
で弾かれてしまう

「ふん！その程度の魔へうならさっきの大砲バコバコ撃たれたほうが  
よっぽどヨルムンガントにとってはいたかつたろうよ！」

「くっ」

「我々も加勢するぞ！」

「突撃イイ！！」

橋中佐の指揮で歩兵たちも一斉に銃を放つ

「ちっ！メイジと平民のご風情が！」

しかしこれらの攻撃は

ヨルムンガントにとっては蚊に刺された程度に過ぎないのだろうか、まったくといっていいほど通じていない

だが

後ろにつけた戦車隊はヨルムンガントに後方から総攻撃を仕掛ける

しかし効果はまったくといっていいほどない

「っははは！後方にも強力なカウンターと分厚い装甲があるのよ！！」

「効果はなしか…」

「それじゃあ！あのヨルムンなんだかつての撃破不可能じゃないですか！？」

「畜生！もつと威力のある砲がほしい！」

「あの…」

「どうしたシエスタ？」

「…大和って船、すごく大きい大砲あるじゃないですか？あれじゃ倒せないんですか？」

たしかに大和の主砲なら

ヨルムンガント撃破は簡単だろう

しかし艦砲射撃は危険を伴う  
陸地に被害が及ぶかもしれない  
だが…

「だったら海軍の軍港にあいつを引き込めばいい！」

「そ…そんな！」

「危険ではあるが奴を

撃破するには大和の主砲が頼りだ！」

「おい！そこの！ちよつと海軍に頼みに言ってくれ！」

「はい！わかりました！」

近くにいた歩兵に

海軍へこの事を知らせるように浩一は命令した

数分後

「海軍さ〜ん！」

「どうした？陸軍さん？」

「あ…あいつを！」

「…そうだろうと思い、提督は既に準備をするように  
命令されました」

「えっ？」

「作戦を教えてください」

「あ…えっとここまであいつをつれてくるんで、46センチ砲を」

「了解！」

なんと海軍はすでに

準備を進めていたのである

まあ船からでもヨルムンガントの巨体は確認できるが

すでに大和と伊勢の砲はヨルムンガントのほうを向いていた

一方 -

「よし！行くぞ！」

歩兵からの連絡を聞いて

海軍基地のほうへ移動していった

「なによ？逃げるつもりかしら？でも逃がさないわよ！」

シエフィールドも追跡をする

「ヨルムンガントって奴！なかなかのスピードだ！」

深追いは危険といわれるが

まさにそれだ、ヨルムンガントは

浩二らの作戦どおり海軍の基地に連れ込まれた

大和 -

「よおし、照準を合わせる」

「外れたら陸軍の基地がドカンだ…」

大和はヨルムンガントへ照準を合わせていた

一方・

「浩二！今ならできるわ！」

「なにをだ！？」

「エクスプロージョン！」

「私だつて役に立ちたい！」

「…わかった…やってみる」

ルイズは呪文を唱え始めた

一言一言丁寧に

一方大和の照準はヨルムンガントにあった

「よし！砲撃開始！」

ドオウン！！

長でかいあの46センチ砲がハルケギニアにきてから始めて、本当に火を噴いた

一方ルイズもエクスプロージョンを発動した

ゴオオ…

両方とも半端な威力じゃない

はたしてどつちが先に！

・  
・  
・

失明しそうな勢いの閃光と物凄い爆音が聞こえた

あたりを見回すと一部建物が破損していた

そして肝心のヨルムンガントは木っ端微塵になっていた

「つ…つかれた…」

「よくやったルイズ、46センチとほぼ同時に当たったから

お前の爆発も効果があつたぞ」

戦艦大和の主砲の威力か？

ルイズの虚無か？

どちらのほうかヨルムンガント撃破に効果的だったかは

これでは明らかにできない

ただ、両方とも破壊力は普通じゃ考えられないほどである

その頃 -

「ジョゼフ様、あの虚無も、戦艦の大砲も、義勇軍もレベルが高い  
みたいよ」



「ふふふ…おもしろい、私の大好きな戦争ごっこをやる相手として  
そしてレコン・キスタの仇をうつ相手として…」  
「不足はない！ッハハハハハ！」

「帰りましょう」

「そうだな」

ジヨゼフとシエフィールドは  
満足そうな顔で祖国ガリアへ帰還した

義勇軍では新たな課題が生まれた

現存の火炮ではガリアの『ヨルムンガント』撃破が不可能である事だ  
数日後、破片とかかっていたカウンターのレベルをコルベールが  
計測した所、貫通力の高い80ミリ以上の砲が必要という結果がでた

144

しかしそんなでかい砲、義勇軍は持っていない

情報部によれば10体ほどあのヨルムンガントがあるという  
10回もこのようにルイズと大和の力で倒すのは不可能だ

一方…学院では野外学習が

行われていたが…そこでもものすごいものを発見したという

15・46cm vs 爆発(後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 16・パンツァー

「…こ…これは？」

「なにあれ？鉄の馬？」

「すげえ！俺本物は始めてみたぜ！」

魔法学院の野外学習にて

なんと場違いな工芸品らしきものが見つかったという  
ダングルテール付近の森である

たまたま同行していたオスマン学院長は  
すぐに中川男爵家へ向かった

「はいはい」

ドアをノックされ浩二は

玄関へ、ドアをあけるとオスマンがいた

「オスマン学院長？お久しぶりであります！」

「やあ浩二君、久しぶりじゃ」

「ルイズも元気にやっておるようじゃな」

「まあね」

オスマンはにこやかに話す

そのため浩二はなんのようでもオスマンがやってきたのか読めない

「そつだそつだ、浩二君に話があるんだつた」

ようやく本題にはいるらしい

「場違いな工芸品が見つかったんだ」

「…本当ですか？」

「ええ、ちよつときていただいて、動かせないか調べていただけませんか？」

「うん、とにかく、地球の物となるとかき集めるべきだろうな」「いいですよ」

こうして浩二は  
オスマンにつれられ、あんまり深くもない  
森へ案内された

数十分後 -

「このあたり…じゃつたような気がするんだがあ…」

「学院長！」

「おお！よかつたよかつた」

「浩二さんはそちらでしたか、いきましょつ」

次第に仲間が増えてゆく  
気がついたら学院の生徒までいた  
森はちよつとずつ深くなつてゆく  
緑の森：その中にとても頑丈そうですごくでつかい砲が  
装備されている、すごく戦車らしい戦車があつた

「浩二さん、こりゃあ、戦車という鉄の馬ですか？」

「…そうでしょうね、ただなんて名前かは知りません」

「砲は…パツとみ80ミリぐらいありそうですね」

「塗装からしてドイツ軍…でしょうか？」

でも私ドイツの兵器には詳しくないので…ここはあいつを頼りに  
するしか」

「あいつ…とは？」

「少々まっていただけませんか？」

「いいですよ」

浩二が認める

ミリタリーに詳しい人物とは？

一時間近く待たされてようやく  
その男をつれてきた

「すみませんな、その人は訓練していたものですから」

「あの？なんか俺に用で？」

連れられてきたのは才人である

たしかに日本の学校では一番ミリタリーに詳しい人だった  
しかも現代人であるため、いつの時代のどこの国の兵器かわかる  
確かにこういう場合才人のような人は役立つ

「こ…これ！タイガー戦車じゃないですか!？」

「タイガー？」

「ドイツ軍の戦車です…見たところは…タイガー1ですね…」

原作ではキングタイガーらしきイラストであったが  
内容的にティーガー1だと思われる為、ここではティーガー1とする

「すごいのか？、たしかに強そうには見えるが」

「半端じゃないですよ、こいつと一対一で戦えばシャーマンはあつ  
さり撃破されます」

「零距离射撃ですら貫通できない正面装甲を持ちます」

「さてよ、それって卑怯じゃないか？」

この戦車は今我が軍が持っている戦車のどれよりも強いではない  
か

「いつの戦車だこれは？我々の視点から10年後か？20年後か？」

「いえ、1944年でしたら、とうの昔にタイガー1はデビューし  
てますよ」

ナチス・ドイツの恐ろしい科学力に

圧倒されるのであった

自分たちはシャーマン1両倒すのに一苦勞なのに  
ヨーロッパではこいつ1両を倒すのに数両のシャーマンが必要だとい  
う  
事実も知り日本の無力さを思い知った

「まったく、日本にはロクな兵器がなかった…」

「これがあれば紺碧島は玉砕せずにすんだかもしれない」

確かに零戦や大和など、戦闘力としては一級品の兵器はあった  
しかし零戦は1940年の飛行機、それを改良したとはいえ  
終戦までずっと使い続けた、一方のアメリカは手ごわい新鋭機を続  
々登場させたというのに

大和だって戦艦同士の海戦ならかなり強い部類だろう  
しかし第二次世界大戦ではすでに戦艦の時代が終わりを遂げようと  
していた

大和は特攻のさいに艦載機に負けた

「…とりあえずこいつをどう持ち帰る？」

「ええ！？持ち帰るんすかこれを！？」

「当たり前だ、今やガリアだってヨルムンガントで  
ここまでこれる時代なんだ、しかもコルベール先生は80ミリ以  
上の貫通力の高い

砲でないとヨルムンガントは倒せないと私に言った」

「…そうですね、こいつの88ミリは半端じゃないですね」

「でも…燃料は？」

調べた所、タイガーの燃料は満タンであった  
固定化の魔法がかけられており状態はいい

「持ち主はいないのか？」

「ちよつと！中川大佐！こつち！」

才人の叫び声が聞こえた

「どうした！？才人君！？」

そこには佐々木少尉のような  
感じで墓みたいなのが建てられていた

「…読めないが…ドイツ語だこれは…」

その横にあつた箱を開けると

「…ドイツの将校の服だ、なるほどこいつの  
乗組員の墓か…」

その後、学院の人たちの力を  
借りてどうにかタイガーを基地まではこんだ

「ちよ…ちよつと浩二！なによこれ！」

「近くの森でみつけた」



「見つけたって…アンタがいつも乗ってるのとは比べ物にならないくらい大きいじゃない！、動くの!？」

「まあ！動くことは動くらしい！」

ひとまずタイガーを八号の横に並べた

その光景を眺める浩二は…

「これほど巨大な戦車を造れる

国力があれば…勝ってたか…あれほどひどい敗北はしなかつたろう…」

その後のタイガー戦車は整備兵の

懸命な整備によって稼動可能になった

性能を試験する為にいろいろなものを用意した

まず航空隊に滑走路を借りた

どちらが速いか調べるといふ

「始め！」

両方とも全力疾走する

八号のほうがちよつと速い

砂を巻き上げとくにタイガーは爆音を轟かせ  
エンジン全開で走った

「すごいな…機動力は八号のほうが上だが

タイガーも八九式よりは速い」

それどころか最高速度はチ八に

匹敵するほどである

しかし機動力では、八号に分配がまわった

続いて、砲の威力のテストだ

わざわざ用意した25ミリの装甲をぶち抜けるかだ

ちなみに25ミリはチ八に相当する厚さだ

まず八号を射撃した

「撃ち方始め！」

結果は悲惨だ、37ミリ砲は装甲をへこましたレベルだ

ではもう一度、同じ装甲厚で今度は88ミリ砲が火を噴いた

結果は何事もなかったように貫通、

破壊力ではタイガーの勝ちだ

防御力は最初から予想がついた、12ミリの八号と1000ミリのタイガーでは

話にならない、実験するほどでもないという

ただしタイガーは機械が多く整備性に欠ける

結局八号が勝るのは機動力と整備性のみであった

この実験結果を元にチ八の戦闘力もタイガーと比較された

加速では勝利最高速度はほぼ同等、整備性にも優れ八号同様扱いやすいのがチ八

火力、防御面で圧倒的な差を見せつけたのがタイガーとなった

才人はこれを元に資料を作成し

最近、中川老人がたちあげた『中川重工業』に提出した

才人も零戦に乗りヨルムンガンと戦い自らその頑丈さを知ったヨルムンガンに十分対抗できる兵器の開発が急務なぐらいわかっていた

ちなみに『中川重工業』は元陸軍の中川老人が

コルベールの力を使わずに大日本義勇軍に弾薬の提供するためにたちあげた

かわりにコルベールはこの会社の開発部に所属し  
新兵器の開発を行っている

流石に大量生産はできないものの

それでも一ヶ月に数種類の兵器を製造する力はあるという

そのほかここハルケギニアで軍需産業を扱う会社としては  
義勇軍に協力してくれた『震天飛行機』がある

## 16 パンツァー（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 17・悪夢

一週間後のある日、御前会議が行われた

「どうですか？外務大臣？」

「ガリアは戦争を遊び程度にしか思っていません  
回避は不可能に近いでしょう」

「そんな…」

「ですが…それは否定できません、  
現にヨルムンガントという超兵器が一体、我が国に侵攻していま  
す」

「まだ正式…ってわけではありませんが  
すでに始まっているのです、『戦争』は」

マザリー二枢機卿はすでに戦争が  
始まっているという、表情はみなとても暗くそして空気はとても重い  
またアンリエッタは以前のアルビオン侵攻で多くの兵を失った事を  
自分のせいだと思っており、戦争はとてやりたいと思う気分では  
ない

ガチャッ

「アンリエッタ女王様！新たな情報が入りました！」

突如現れたのは義勇軍情報部とも  
繋がりがあり現『銃士隊』隊長アニエスである

「現在ガリア軍20万がラグドリアン湖の国境へ北進しているとの事です」

「ええ!？」

「そのうちの何万かをトリステイン本土に侵攻させるつもりでしょうか？」

トリステインにとって以外な展開である

ゲルマニアのほうが先に宣戦布告してくると予想していた  
しかしこの流れからガリア軍が先に宣戦布告をしてくる可能性が高い

「そういえば、ラグドリアン湖のトリステイン基地へ本日、中川男爵率いる

戦車隊が共同演習の為、いるとの事です」

「…」

アンリエッタはラグドリアン湖で

血塗られた歴史をつくりたくなかった

愛していたウエールズ皇太子と出会った思い出の場所である

琵琶湖ほどの大きさがあるこの湖は

とても綺麗で風景もすばらしく、よく園遊会が行われる

一方でガリア側にはタバサの実家がある

戦争になればガリアはここから

やってくるだろう、しかし思い出の地を戦場にしたくないという  
アンリエッタは命令した

「もう一度、もう一度外交でがんばってください！」

「しかし…これ以上は」

「アンリエッタ女王様、ここは…戦争の準備を行い、トリスティン軍と義勇軍の主力部隊をラグドリアン湖に配置し、迎え撃つ準備をするべきです！」

マザリーニ枢機卿の言葉は正論といえば正論

今のうちにラ・ロシエールより兵を送ればギリギリ間に合うはずだ  
しかし…

「ダメよ…そんな！」

「女王様！？国が危ないのですぞ！」

「…」

ウェールズの思いを

心から消せばすべては解決する

しかし元々心は優しいアンリエッタにはそれができない  
指揮官としては失格だが人間としてはいい奴である

一方、

「では、私はしばらくここに残るが  
皆は撤退を始めてくれたまえ」

「はい！」

チハ5両、タイガー1両は撤退を始めた  
浩二がここに残る理由はこの綺麗なラグドリアン湖でルイズといっ  
しょにいたかった

田口とシエスタも同様である

演習が終わり撤退を始めた義勇軍でここに残されたのは  
八号と浩二・ルイズ 田口・シエスタのみである

「ちょうどいいな、戦車に燃料もない」

「明日給油して帰ろうか」

「そうだね」

二人は湖畔を散歩した

「アンタと結婚できてよかったわ」

「ん？」

「アンタがいなかったら絶対体験  
できないような事いっぱいできたし」

「えっ？どんな体験？」

「鈍感、たとえば日本よ」

「ああ、たしかに鉄道乗車とかはハルケギニアじゃむずかしいな」



「まあ最近春奈の妹ががんばって鉄道建設しようとしているけど」

「どうでもいいわよそんなこと！…でもいい新婚旅行だった」

邪魔者はいたがと思った

まあルイズにとって日本は

あまりにも斬新すぎた

それなりに楽しかったので文句はあえていわないことにした

二人は体をくつつけた

「これからもよろしくね」

「こちらこそ」

だが…

「敵襲ー！！！！」

突然トリスティン兵が叫んだ

「！？」

「ルイズ！」

「うん！」

二人はトリスティン軍基地のほうへ走っていった

「何事だ！？」

「はい！ガリアのほうから…ものすごい数の大軍が！」

「なんだと!?!」

「どうしましょう…このまま戦えば…我々は玉砕です…」

御前会議の場面から時間にして2時間、ラ・ロシエールからなら航空機はとっくのむかしに到着している

陸軍だつて最近開発された東方号などの船から降下できる

ここで、義勇軍よりもらった電報（ハルケギニア語版）でトリスティン王城に打電した

王城

「敵襲来、数不明、予想7万」

「女王様があんなこというから…援軍が間に合いませんでしたぞ」  
「数は7万、アルビオンに勝てた軍隊も近くにいるというのに」

「ごめんなさい…私のせいです…ごめんなさい…」

「しかし…そう悔やんでいてもしかたありません  
ひとまず現存部隊に防衛を任せ、今からでも！」

「…そうですね…」

湖畔

「中川大佐！」

「わかっている！」

「畜生…いまから給油しても遅い…弾なんてあっても自走できなきゃ意味がない」

「浩二！私が時間稼ぐから今のうちに！」

「ルイズ！ダメだ！あまりにも危険だ！」

ルイズは自ら

時間稼ぎとして一人で戦いに身を投げようとするもそれに断固反対する浩二である

「援軍が来るでしょ！だったら私が一人でその時間を稼ぐから！」

「馬鹿！そんな事させるわけないだろ！」

「さっきまでの幸せはなんだったんだ！？」

「…アンタの為よ…」

アンタの為じゃないんだからといいそうなルイズだがここでははっきりと浩二のためと宣言したかなりデレているご様子

「我々が時間を！」

「ダメよ！私が！」

その時、浩二はルイズを思いっきり殴った

「!?!」

ルイズは気絶してしまったようだ

「ちょ!自分の愛妻になんてことを!」

「すまん…ルイズを殺したくなかったただけだ」

ものすごく反省している模様

「俺なりに考えて一番いい黙らす方法だった

まったく俺は馬鹿な男だ…」

「…田口、戦車の中に三八式と手榴弾三個、あと恩賜の軍刀があったろ、とってくれ」

「はい!」

要求どおり浩二が言った物を

田口はとってあげた

「すまない」

「…まさか…中川大佐…」

その時、トリスティン軍から電報が

15分後には戦闘機部隊の援護がくるというものだ

「15分か…まあいい、愛する者の為なら…」



## 17・悪夢（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

時期は違えどゼロ魔には1人バンザイ突撃が

あったほうがいいかなという勝手なご都合であります

## 18・パンザイ突撃

浩二の言葉はなにを意味するのか

それを一番最初に理解したのはやはり日本軍出身の田口だ

「まさか…中川大佐…」

「田口、シエスタ、ルイズを頼んだ」

「大佐…おやめください…15分とはいえ…お1人で7万相手に時間稼ぎは…」

「…そうです…せめてもの…私もお供させてください!」

「光雄が行くなら、私だってお供します!」

「我々も!全兵力をつかって!」

だが浩二はその要求を断った

「馬鹿者!! せっかく援軍がくるというのに

お前らに損害がでたら…意味はないだろ」

「それに、俺が戦死した事を伝えられるのは目撃者であるお前らだけなはずだ」

「貴族の名誉…とやらの為ではない、俺はルイズの為にこそ、死に行くのだ」

「大佐…」

「田口、シエスタ、ルイズを頼んだ」

浩二は急にキリッとした表情になり  
この時たまたま着ていたカーキ色の上下上のポケットに入っていた  
あるものを出した

「これは…」

「我が家に伝わるお守り…らしい」

「これを…形見にしてやってくれ」

そういつて、浩二は体も本気になり  
陸軍式の敬礼をした

田口、シエスタも真似をして陸軍式の敬礼をする  
これはあるいみ礼儀であった

（敵は…近い…）

（15分…耐えなければ！）

突撃を決心、おまいつきりかけていった  
そして7万の大軍の中へ

心を元気づけるため、万歳と叫び続けた

「万歳！！！！」

「敵襲！」

ガリア軍も浩二に反応したのか  
全軍に浩二へ攻撃するよう命令した



ガリアのメイジ達の魔法が飛び交う中  
それをすべて交わし浩二は走り続ける

走りながら銃の照準を合わせる

パン！

彼の放つ三八式の銃弾は  
百発百中、6人を一気に射殺した

続いて十四年式をとりだした  
こちらにも命中率が高い、8発中7発を当てた

つづいて手榴弾を投げた

「貴様らの魔法が命中したときみたいにぶっ飛べ！！」

力の限りおもいつきり投げた  
そして手榴弾は爆発、その後も休みなくすべての手榴弾をなげた  
これだけでもかなりの戦果をあげた

しかしもう弾もなにもない  
あとは刀と己の拳のみである

ギーシュのワルキューレやヴァリエール公爵すら倒しかけた恩賜の  
軍刀  
を抜き単独突撃した

「万歳イイイ！！！！」

一発ぶん回すとガリア兵の  
本当に苦しそうな断末魔がきこえた

「ぎいやあああああ！！！！！！！！」

後ろからも敵がくる！

ドガアッ！

一発華麗な李蹴りを披露

元々歩兵である為、白兵戦は得意中の得意であった

ザクッ！

「ぐあああ！！」

その時、倒した一人の兵士がもっていた  
槍を鹵獲、ぶん回した

これだけでも効果は絶大である

もはや、浩二は日本陸軍の軍人  
というよりも戦国武将であった  
見事なる槍さばきで次々と敵を倒した

だが！彼自身の方に槍が刺さった

だが痛みがもしない、アドレナリンが全開なのだろう  
ただ、鋭い目つきで睨んで普通ならいたくて動かせないだろう  
やられた肩のほうの腕で攻撃、急所にはいりガリア兵は倒れた

ふたたび槍をもち戦い続けた

今度は炎の魔法があたった

「ぐあ！」

だが彼があげた声はこれだけである

その後、ボロボロだというのにまた立ち上がり  
戦いを続けた

その姿を見た者はおびえた

「あ…あいつ！いくら倒しても立ち上がって…！」

「バケモノかあいつは!？」

だいぶ負傷はしているがまだ浩二のほうが強い

一方・

「…んん…」

「目覚めましたか、ルイズ！」

「…浩二…!!!!」

「浩二は!？」

「…あいつはお前の為に…1人7万を相手に戦っている」

「そ…そんな!!」

ルイズは急に立ち上がり  
走り出した

ガシッ

「待て!いつでも無駄だ!」

「放して!浩二を助けないと!」

「待つんだ!あいつはお前の為に!

お前が死んだら元も子もないだろ!」

「いやだあ!浩二が死ぬなんていやだあ!」

涙を流しながら訴える

ルイズだが田口はそれを無視しつづけた

「大佐は俺と同じ!日本人なんだ!!」

「言われた事は果たさなければ気がすまない!

それを途中でやめさせられるなら死んだほうがマシだと

大佐も思っているはずだ!」

「なによなによ!貴族の名誉と

話が同じじゃないの!」

「浩二の馬鹿!死んじやつたら私に会えないのよ!」

「意地でも助けに行くわ!」

「あっ!まで!」

田口はルイズを追いかけるも  
ルイズもアドレナリンが全開になったのか田口よりも足が速い

(くそ…おいつけぬ！)

(…そういえばもうそろそろ15分だが大佐はまだ戦っているのだ  
ろうか!?)

一方・

「うおお!!」

グサアツ!

「ぎゃああ!!」

血だらけ、骨も折れているみたいだが

「闘争か逃走かのホルモンがはたらき体の痛みなど感じない  
死ぬまで戦う状態だ

刃物の切れ味が悪くなると

素手で戦い始めた

足の骨も折れているというのにまだ走れる

炎の魔法が右肩に命中し、右肩に火傷をおっても  
まだ戦い続ける

バキイ!

通常時のパンチの倍以上の威力がある

ただでさえ肉弾戦は強いほうだった浩二  
それが倍以上となると顔を殴られれば普通の人間は  
最悪死に至るほどの威力がある

その光景を見ているものもいた

「シェフィールド…あいつすごいじゃないか？」

「ええ、なんの為かは知りませんが…一人でよくやってるわ」

「面白い…ために7万を投入してみたが…これはおもしろい！  
トレスティンとの戦争はものすごく面白いぞ！」

「さあ！そろそろ時間だ、これ以上損害が大きくなっても困るし  
兵士達に撤退の命令をしろ！」

「わかったわ」

一方、

バキィ！

ドラ ンボールでも初期の 空になら

かなりのダメージを与えられそうな…というよりヤ チャならまち  
がいないく

倒せる勢いである

その時、「撤退！！」という声がきこえた  
その声とどうじにガリア兵は撤退を始めた  
兵士が落した槍を広いぶんまわしはじめた

「来るならきやがれ!!」  
だがガリア兵は命令に従い  
この場所を逃走する

・  
・  
・

戦いは終わった…

15分間時間を稼いだ

今戦闘機隊がくるが敵が撤退しているのを確認、攻撃はしなかった

ちょうどルイズ達もきた

「浩二!!」

そこにはすべての力を使い果たしたかのように  
浩二が立っていた

「…今更きやがったか…航空隊…」

そういつて、浩二は倒れこんだ  
ものすごく痛がっている様子だ

「浩二!浩二!」

1人で7万と戦い、時間を稼ぐことに成功した浩二  
しかし体はボロボロ、生還の道は?

## 18 パンザイ突撃（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ



## 19 ・ガリア、ゲルマニアの軍勢力

浩二はその後、国でもっとも

医療についてくわしいモンモランシーの元へ運ばれた

数時間後 -

「よかった、応急処置はしてあるみたいね」

「どう…直りそう？」

「ルイズ…多分…心配ないわ」

「幸い致命傷ではないみたいだから」

「よかった…」

モンモランシーは治療魔法を

浩二にかけた

・  
・  
・

「…ん…ん…」

目をあけた

「ごめんなさい…今の私では

これが精一杯ですわ…」

そうはいえが浩二は

先ほどよりは随分マシになった

「…」

「浩二！」

突然ルイズがだきついた！

だが！

「いってええ！！！！！」

「あつ！？ えと…ごめん！」

「はぁ…ひい…はぁ…ふう…」

「んもおルイズったら、負傷者

はさつとしておきなさい」

「また重傷負ったらどうするの？」

モンモランシーは怒った

「ごめん…でも元はと言えば浩二が

私の代わりに突撃するからよ…」

「すまぬ…お前には生きてほしかった」

「お前は俺より若いからな…」

「無責任な夫でごめんな」

「もつ…いいわよ…アンタ熱い人だもね」

幸い、浩二はモンモランシーの  
手当てにより、全治一週間らしい  
毎日根気よく魔法をかけていければのはなしたが  
人命救助が得意であるモンモランシーならたいして苦痛でもないだ  
ろう

一方 -

「アンリエッタ女王！もし開戦となれば！  
我が義勇軍はそれほど長い間戦えませぬ！」

山下が熱弁している

：というのもあの攻撃の直後ガリアから宣戦布告をうけたのである  
山下のほかにも、陸軍元帥ジュールコフや連合艦隊司令長官の伊藤、  
義勇航空隊の加藤などの義勇軍上訴部の人間がいた  
また、アルビオンのロンメルやモスクワのモスクワスキーも招かれ  
ている

「そうですね…全員死なないで想定すれば  
半年から一年が限度でしょうか？」  
「いや規模的にもっと短いかもしれません」

「…そうですね…国が危ないんですもの」  
アンリエッタの心は一つになった

国力的にガリアには勝つことはほぼ不可能…となれば  
連戦連勝して早期講和を結ぶ、山本五十六の作戦みたいなのをとろ  
うとした

しかし、失敗すれば水の泡  
山本五十六の二の舞になってしまう

根こそぎ徴兵っていう手もあるが  
あまり効果は望めない、人口がギリギリ政令指定都市になれるレベル  
しかないトリステインでそんなことやっても50万もあつまらな  
いだろう

開戦は正式に決定した  
先制攻撃あるのみだ

義勇軍 -

「…さて、どういう作戦で？」

「まず我が海軍の戦力です、戦艦2隻、空母1隻、航空機数十  
これではあまりおおきな海軍と戦えません」

隼鷹を軍に編入した義勇海軍は  
この隼鷹を航空母艦として利用することにしたそうだ

また最近義勇軍航空隊の空飛ぶ竜空母としてデビューした「ヴュセ  
ンタール」の艦載機として  
利用される事になったのは日本海軍の九〇式艦上戦闘機、イギリス  
海軍の

ソードフィッシュ攻撃機、どちらも旧式だ  
航空機不足という同様の問題から安上がりな旧式の艦載機を  
採用することになったそうである

どちらも複葉機の旧式であるが  
甲板が短いヴュセンタールの運用には向いているし  
風竜が相手でなければ落されることはまずない

30機搭載できるこの船だが現在戦闘機は8機、雷撃機は7機集ま  
った

半分にすぎない数だが予算の都合と、これくらいが妥当であろうと  
いう考えだ

この日の夜、正式にトリステイン側に協力することにした  
タバサがガリアから一枚の写真を持ってきた

ガリア国民である彼女にやせれば偵察も危険ではないだろう

「これは…」

国境付近の基地にはかなりの人数のガリア兵  
そして、苦勞して倒したヨルムンガント10体ほど  
さらにどういうわけか戦車まであった

この写真を見た義勇軍の人々は  
目を疑った

自分の国の兵器しか詳しく知らない山下やジューコフに  
解説すべく、中川老人や才吉もここへかけつけた

「…こりゃあ…フランスの騎兵戦車じゃな」

「ソミアアSS35、おそらく地球人が持ち込んだ

ものじゃろつが…まさかガリアがこいつをもっているとは」

「確認できるだけでも30両はありますな」

「まだあるぞい、シャルルB1重戦車bis…オチキスH35軽戦車…ルノー D2中戦車」

「70両近くはありますな」

「問題はガリアがなぜこれほどの兵器をもっているかじゃ」

「航空は？」

「今の所確認できません」

場違いな工芸品はよく

ハルケギニアでも見つかる

しかしこんな数は異例中の異例である

これに加わり、よく鍛えこまれた正規軍、優秀なメイジで編成された部隊や

空と海、どちらでも作戦行動がとれるガリア両用艦隊など、どれをとっても

トリストイン軍の上をいつている

ましてや当時、イギリスの戦車やアメリカの戦車がドイツの戦車に圧倒されている時代に

そのドイツの戦車にすら抵抗できるというフランス製の戦車が数多く配備されている

特にS35中戦車は同世代の戦車よりも装甲、火力、で勝り速度も同じ中戦車であるチハよりも速い

整備は難しいがおそらくガリアは固定化の魔法をかけているのだろう

「3号戦車の砲撃に耐えうる装甲をもち撃破さえできるS35、火力はS35に劣るが

さらに頑丈なシャルルB1bis…ほかにもそこそこ強いフランス製の戦車が

これほど…今ダンゲルテールに集中している戦車隊は軽戦車2両、中戦車5両、重戦車1両」

「しかもタイガー以外はお粗末なものばかりです…質、数ともに我々は劣勢です」

強力なドイツ戦車にすら対抗できる

フランスの戦車約70両に対し、義勇軍がもっているのは八号3両、2号火焰戦車1両

九七式中戦車5両、タイガー重戦車1両の計10両、しかもタイガー以外の戦車は

お粗末なものばかりだ、2号だって20ミリ機関砲がない火焰タイプでは対戦車戦闘の能力は

大きく失っている、チハの主砲は頼れない、八号もチハの装甲すら撃ち抜けない

37ミリ戦車砲では頼りにならない

火炮も十分な数がない、こまったものだ

「タバサさん…でしたな、ガリアが場違いな工芸品を集めているという情報とかはありませんか？」

「はい」

なんとガリアは場違いな工芸品を集めていた  
魔法先進国という称号はとっくのむかしからあるもの  
まさか技術先進国に進化しようとしているとは

「20年前から集めているらしい、よく場違いな工芸品は聖地付近  
で見つかる、

集めては固定化の魔法をかけてメイジ達に魔法で運用させている」  
「しかも弾の複製ができる人もいる」

コルベールしかできない  
技術と思われていた魔法での弾の複製を  
ガリアのメイジはできる人が多いそうだ

しかも聖地付近でよく発見されるということも知った  
聖地がどのような場所かは彼らにはわからない、  
しかしこんなに聖地の近くでみつかるんなら地球と関係がありそうだ

「もちろんガリアだけじゃないわ」

そこにキュルケが現れた

「ゲルマニアもやってるみたいよ、戦車とかいう鉄の馬を20両ほ  
どかき集めたらしいわ」

「まあ幸い軍人のほとんどが今までの装備しかないってことかしら  
？」

「戦車にあわなければ勝ち進む事は可能よ」

「…ところで、聖地とは？」



「ああ、今でこそエルフの住処だけどね  
どこからきたのか場違いな工芸品がよくみつかるとよ」

「…ということは…あのフランス戦車は  
1940年からきたのか…」

ナチス・ドイツのフランス侵攻の時から  
きたものだと才吉は予想した  
この時撃破されたはずのフランス戦車が  
なんらかの形で迷い込んだのだろう

今回は数こそ多いがあんまりびっくりはしなかった  
アルビオンが秘密兵器として疾風を2機もっていたからってのもある

とにかく義勇軍最大のピンチである  
ガリアとゲルマニアを合わせれば100両近い戦車がある  
10両の戦車と数少ない対戦車兵器でどうこの大軍に立ち向かうべ  
きか悩まされた

## 19 . ガリア、ゲルマニアの軍事力（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

某所にて自軍ばかり圧勝しているところまらないと

言っのを聞いて、それで苦戦する要素を入れてみました。

## 20・島国からの特使（前書き）

さて今回よりクリスとクリスの国が登場です

## 20・島国からの特使

一週間後、学院 -

「すまない、世話になりました」

「いいのよ、人助け好きだもの」

「まったく、もうムリしないでよね」

「これでわかったさ、まったく万歳突撃を考えた奴は誰だ」

そうつぶやき、ダングルテルの自宅へ戻ろうとしたら  
そこにはアンリエッタ女王の馬車があった

「ひ…姫様!？」

「ルイズ!それに中川さん!」

「大丈夫?」

「ルイズは大丈夫です、自分は負傷しましたが  
このとおりもう元気で」

「よかった…そうだ、本題があるんだった」

「本題?」

「ええ、私の友達に王女様がいるんですが  
お友達が、国の特使としてきたんです」

「特使…ですか？」

「なんでもガリアの事についてらしく」

「それで軍に協力してほしいって…」

「わかりました、必要であれば向かいますよ」

浩二とルイズも行く事になったそう

馬車に揺られること2時間、王都トリスタニアへ到着した

綺麗な街の風景をみつつ、着々と王城へ近づいていった

会議室

そこには、山下総帥、ジューコフ元帥、それに伊藤長官までいた

「あ…あれ？」

「おお、きたか」

「中川大佐もダングルテール守備隊の総司令官として是非参加してもらいたかった」

「そうですか」

三人も浩二を待っていたらしい

今度は向こう側のドアがあいた、金髪の少女とアンリエッタ女王が入ってきた

「おまたせしました、彼女が私の友であり

アイルランド王国王女であります…」

「アンリエッタ、私のセリフをとらないでくれ」

「あ、ごめんねクリスマス」

「私はクリステイナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシエルナ  
アイルランドというアルビオンの近くにある島国の王女だ」

「アイルランドだって？」

それは、地球にもある地名だ

ハルケギニアの地名は地球に似ている点がある

あるので前々から疑問におもっていたことではあるが

今回さらに疑問が深まった、アイルランドはブリテンの隣ではないか

「ア…アイルランド？」

「知らぬか？…って日本人がお前たちは？」

突然日本人かきいてきた

なんなのだろうこの娘？と思いつつ浩二は答えた

「まあ、私と、山下総帥と伊藤長官は日本人です」

「おお！日本人に出会えた！」

「あ…あの…クリステイナ姫…日本人となにかあったのですか？」

いくらなんでも名前がながいのでクリステイナ姫と

呼ぶ事にしたらしい

「ああ、私の剣の師匠さ、幼いころに出会って  
1年前に死んでしまったが…とにかくそれ以来私は日本という国が  
好きで好きで、師匠はいつぱい国について話してくれた」

クリスがいうに、有名な戦国武将や

日本料理、日本の主要都市の名前ぐらいはわかるらしい  
また、かつての大日本帝国の存在も知っていた

「詳しいですね、いったい師匠はどのような方で？」

「さあ？ただ剣のほかにも格納庫に馬みみたいな鉄の塊を  
しまっていたり…」

一瞬にして戦車だとわかった

その師匠は元軍人だったのだろうか

「そうだ、正式な名前は忘れたがなんとか自衛なんかって組織に  
所属していたそうだ」

「えっ？」

浩二は春奈や才人と会話したり、また現代日本

にいたりしているのですその組織がなんなのかわかった

鉄の馬…おそらく戦車…戦車を装備している…そう、『陸上自衛隊』  
である

「陸上自衛隊…？」

「なんだそれは？」

「春奈や才人君から聞いたが、戦後の日本の防衛組織である自衛隊の陸の守や、陸上自衛隊、軍隊という陸軍に相当する組織です」

「なんと！戦後には帝国陸海軍が解体されてしまったというのですか！？」

「らしいですが、最初の警察予備隊やその後の保安隊に続き、自衛隊という

組織が生まれたそうですね」

「とにかく、戦後日本の国防組織です」

「なるほど」

納得する山下

やはり国防組織がちゃんとあったことに安心したのだろう

さて、ここで本題である

「そういえばクリス？本当は何の用事で？」

「そうだ、皆さんに助けてほしいのです」

急にクリスは困った表情になる

「実は我がアイルランドは今、ガリアの侵攻に遭っているのです」

「ガリアですって！？」



まああの大国ならやっても  
不思議ではないだろうが

「ガリアは2万で上陸してきたが我が国の  
陸軍は8500名、海軍はほぼ全滅、空軍も損害が大きくなりつ  
つある」

「そこで、友であるアンリエッタのトリステインに  
ものすごい武装してある軍隊があるときいてやってきた次第です」

クリスは義勇軍を  
求めてやってきたそうだ

「お願いだ！協力してくれ尊敬する日本人の軍人よ！」

ここまで必死に頼む  
クリスを見ては流石に  
断りようがない

第一相手はガリアだ、どの程度の実力があるか試すのに丁度いい

「わかりました、やりましょう」

こうして、正式にアイルランドと軍事同盟を結んだ  
トリステインは正規軍1000、義勇軍は浩二率いる戦車連隊と橋  
中佐率いる

歩兵連隊、大和と伊勢 隼鷹とその艦載機（九九式が新たに5機増  
えている）

さらに最近航空隊に新設された「空中艦隊」

これはハルケギニアの木造船を目にした中川老人と才吉が開発中であつた空飛ぶ船の製造過程を見て感激し航空隊と議論して採用されることになつた

戦闘能力は近代兵器に劣るものの

メイジが数十名いればあとは平民でも乗せておけば動くのでそれほど人手不足に困らない

それに相手も木造船なので数を揃えれば互角に戦える  
また航続距離もながい

なにより一番はがんばれば一週間に一隻建造できることだ  
アメリカの週間空母並の速さで造船できるのだ

既に空飛ぶ空母一隻と戦艦一隻、そしてコルベール作の「東方」級  
偵察艦

が就役している

しかも今までこの世界で作られた船よりも戦闘能力は上だ

空母にはもちろん艦載機が、戦艦にはカタパルトが装備され航空機が発艦可能

砲の数も比べものにならない、この戦艦は「リシユリユー」号と名づけられた

名前にも元がある、これはフランス戦艦からとつたものだ

現在二隻目の「ジャン・バール」号が建造中である

本題に戻ろう

アイルランドへ向かわせる事がこの会議で決まつた

アイルランド王国は島の小国で

かつアルビオンの近くにおり、王制時代とロンメル統治である今のアルビオンとは  
仲良しである、その為他国に侵攻される心配はほとんどなく  
軍事よりも行政に力をいれていた

その為兵員が少なく

陸軍は8500名しかいない

しかもほとんどが平民で編成されている為

他国の軍隊よりも実力は劣る

クリスの師匠がもってきた戦車らしきものは  
軍のものではないので戦力に加えられていない

海軍も空飛ぶ船が戦艦1隻、巡洋艦2隻、駆逐艦4隻、

爆撃艇（爆撃機の代わり、アイルランド王国にしかない革新的な船）  
1隻しかない

しかもガリアの大艦隊の前には相手にならず駆逐艦1隻と爆撃艇1  
隻が残るのみ

空軍は竜が40ほど、連日の戦闘で半減しているが

そして、これまた耳寄りな情報、上下に二枚羽がある竜…証言から  
推測し

複葉機らしき飛行機があるという

これは圧倒的な強さを見せて

今も前線で戦いガリアの竜を迎撃しているそうだ

弱そうに見えているんなものがある

アイルランド、義勇軍の皆は興味を示した

その1人が才人だ、まだあんまり活躍していない彼だが  
隼鷹の乗組員として今回戦いに参加すると決めた  
もちろん愛機は零戦一一型

3日後…

## 20・島国からの特使（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ  
なおクリスの師匠が自衛隊の人なのは単にWW2兵器ばっかで  
流石に偏ってかと思いましたがので戦後兵器を  
登場させようかなと思いました

## 21・出征

ダンゲルテールの軍港には近代艦3隻のほかにも  
トリステイン・義勇軍の空飛ぶ船があつた

空でも海でも運用できる船なのも特徴のひとつだ

今回義勇軍はトリステイン軍から輸送船を1隻  
購入、これに陸軍主力部隊を乗せる予定だ

「じゃあ、気をつけてね浩二」

「ああ、必ず帰ってくる、ルイズ」

二人はお互い別れをつけ

浩二は船に乗り込みルイズは家に入った

鐘とともに旗艦の大和を先頭とする義勇軍第一艦隊とトリステイン  
船すべての艦艇が出航した

義勇軍輸送船内

「どうしたんすか大佐？」

「いや…大東亜ではよく日本の輸送船が撃沈されたじゃないか？  
この船は大丈夫なのかなあつて…」

浩二はどうやら輸送船に乗ること事態が不安であつた

そんな位浩二にシエスタが元気付けようとした

「大丈夫です！ヤマトのようなおおきくて強そうな船があるんですから！きつと！」

それもそうだ、この世界の船は木造船だ

そんななかに鉄でできた戦艦2隻にさらに竜よりも数倍強い飛行機を多数搭載できる空母があればそれだけでもハルケギニアのどの海軍よりも強そうに見えるものだ

その後、浩二は格納庫へ向かい自分の戦車（八号）を見つめた

「…こいつは弱いけどよくがんばっている  
今回もがんばってくれよ…」

リベットでとめられてかくかくしていて砲も細いかにも弱そうなの戦車に浩二はそれなりの愛着をもっていた

「…旭日号…」

八号に旭日号という名前をつけているらしい

ちなみにタイガー戦車もつまれていた重量オーバーでは？と思われたが魔法でどうにか持ちこたえさせているらしい

その頃、隼鷹・

「…」

「才人君…だったかね？」

「！！ 貴方は角田中将！？」

「ほう、話では私のいた時代よりも随分未来の人間らしいが、よくご存知ですな」

「いえ…実は好きな空母が隼鷹だったもんで」

角田覚治、海軍中将

第1航空艦隊司令長官である

なぜここにいるかというと、

どうもこの隼鷹は別世界からきたらしく輸送作戦に参加し航空隊を指揮していたそうだ

航空戦に詳しい人がいてくれて助かったといえはたすかった

「そうか、君の愛機の零戦、どうやらすこし違ってみただね」

「はい、うちの爺ちゃんが現代の技術で造ったもので」

「そうかい、才人君の操縦の腕前は？」

「はい、大体爺ちゃんに教えてもらって



最近は毎日訓練していますのでだいぶ」

「そうか、多分ガリアって国の竜やらと空中戦になるだろうから、頼むぞ」

「はい！期待は裏切りません！」

才人は目をきらきらさせていた

本物の軍人、しかもお偉いさんとお話できて感激だった

一方、クリスは旗艦である大和にのっていた

「しかし…ほんとうにでっかい砲だな」

「ええ、46センチはありますので」

大和の砲を見て感激していた

そして密かに胸でこう思っていた

（この人たちなら…絶望的な戦局を打開してくれるだろう）

クリスは義勇軍に期待していた

…その後 -

「あとすこしてつくと思っ」

「わかりました」

クリスの情報を元に航海する  
連合艦隊、クリスから伝えられた情報はさらに別な艦へと  
伝えられる

輸送船 -

「あとすこしらしい」

「撃沈されませんでしたね」

「よかったよかった」

「流石に潜水艦は存在しないか」

「まあ幸運といえば幸運ですな」

ガチャッ

そのとき、部屋のドアがあいた

「皆様！そろそろ到着いたします！」

「うん、準備だ」

その頃、大和 -

「11時の方角に敵艦隊！」

戦艦1、重巡1！軽巡3！駆逐艦5、その他輸送船8！」

「空飛ぶ船です」

「長官！」

向こうからガリアの艦隊がむかってくるという

輸送船の数が多い事から向こうも島へ上陸するつもりだろう

「…輸送船のみ、向かわせろ、ほかの艦艇、艦載機は

敵艦隊と戦い上陸の時間を稼ぎまた敵の輸送船をなるべく多く撃墜し

降下戦を避けるべし」

伊藤長官の判断により

輸送船のみアイルランドへ行かせ

残りの艦艇と航空兵力で敵艦隊の撃滅を行う事になった

その後、伊藤は甲板へ走る

王女様の元へ向かった

クリスは敵艦隊をみて

さすがに不安そうな表情であった

「不安でありますか？」

「はい」

「まあ、見ててください、我々連合艦隊の底力を」

ここではじめて、海軍が海軍らしい仕事をする事になる  
数では敵が勝る、行け連合艦隊



## 21 出征（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ  
なお次回は海軍主体の予定です

## 22・義勇軍聯合艦隊vsガリア両用艦隊

上陸部隊を護衛する目的で同行中である戦艦2隻、空母1隻の連合艦隊は

ガリア軍の艦隊を発見、アイルランド上陸を成功させる為に、ガリア両用艦隊の足止めを行う事になった

「長官！クリステイナ姫！甲板は危険です！

どうか中へ！」

「私は連合艦隊司令長官として、この場でこの戦いを見なければならぬ」

「かの東郷平八郎も、危険な所にいた」

「私も、一国の主の娘として」

「…わかりました」

その時、航空機のエンジン音が聞こえた

空飛ぶ船を相手にするには対空砲火よりも航空機に搭載されている爆弾を用いたほうが楽であった

「長官！」

「ガリア艦隊のほうから今度は海上艇2隻…なんだ？」

「規模と形から1隻は戦艦！もう1隻は空母です！」

情報部による情報では  
ガリアは戦車こそもっているものの近代艦艇は  
一隻も保有していないとの事だ

ドゥーン！

その時、46センチほうが火を噴いた  
数秒後向こうに水柱が見えた

「砲撃開始か」

続いて、後方の伊勢も発砲

敵艦隊もこちらに撃ってきた、さすがに空飛ぶ船から  
撃つ砲弾はこちらの艦艇に命中しない

しかし

ゴオオオン…

「一発被弾！」

「損害は！？」

「確認中です！」

「…ありません！」

あたったにしても、中世レベルの  
大砲では大和に損害を与える事はできなかった

一方、上陸部隊 -

「よおし、行くぞ！」

まず人が走って上陸

つづいてメイジ達が手際よく手伝い

戦車を降ろす

「こ…これ降ろすの？」

タイガー戦車を降ろすのはさすがに

絶望感があったそうだ

ドイツ軍が生み出した当時最強であつたらう

重戦車、戦闘力は高いが輸送に向いているとはいえない

一方八号やチハは戦車としては非常に

小型だったため、降ろすのが楽であつた

「最後は連隊長殿の戦車です」

…

浩一の八号が地面にキャタピラをつけた

「よし、我々も旭日号も無事に輸送できた

後は敵を迎え撃つ準備をするのみ！」

航空隊 -



「才人君！私の掛け声と共に爆弾を敵艦に落せ！む

「はい！」

「よし…今だ！」

・  
・  
・

数秒後に爆音が轟き炎が舞い上がる

「弾薬庫に命中したみたいです！」

「あいつはもうダメだろう」

ダダダ…

「な…なんだ！？」

その時、機銃で射撃を  
している航空機に気がつく

「…F6Fヘルキャット！？」

「それも3機！」

1機はイーガー少尉機があるのだが  
なぜ3機もあるのかわからない

才人は下を見下ろすと…そこにはとんでもないものが目に映った

「!?!」

「あ…あれは!?!」

「しっているのか!?!」

「はい!!空母エセックスに戦艦モンタナです!

どちらも米軍の艦艇です!」

「なんだと!?!」

才人が艦艇のなんなのか  
判別できたのは定期的に購入するミリタリー雑誌のおかげである  
ある意味敵軍がなにをつかっているのか判別できる為、便利な男で  
あった

しかし、最大の問題は何故、ガリアがエセックスとモンタナを持っているかだ

特にモンタナは建造取りやめになった戦艦である  
アイオワ級の拡大改良型で大和に匹敵する戦艦である  
しかし第二次世界大戦時、すでに艦隊決戦の意味は薄れはじめていた  
海戦は機動部隊と機動部隊の戦いが主になり  
しかもほとんどが航空機による戦いであった  
戦艦という種の船はもうない、需要がないからだ  
その始まりがすでにこの時始まっていた

モンタナはレーダー管制による射撃システムがあり  
また主砲である50口径40.6cm砲がアイオワ級の6門からこ  
のモンタナ級は9門に増やされ  
攻撃力が増加、防御力も高くその能力は大和を凌ぐと言われている

伊勢 -

「撃て！とにかく撃つて1隻でも多く撃沈しろ！」

対空砲火をガリア輸送船へ集中射撃  
大量の船が火を噴いた

「しかし航空隊はなにをしているのだ？  
全然艦船に損害を与えていないではないか？」

航空隊はヘルキャット戦闘機の激しい迎撃に  
さらされていた、厳しい戦いであった

「くそっ！、流石にヘルキャットは手ごわい！」

「任せろ！」

そこへ同じ機種にのった  
イエーガー少尉がきた

ダダダ…

イエーガー少尉の活躍により  
一気に2機を撃墜

しかし

「こちらの爆撃機が2機！火を噴いて降下中！！」

「くそっ！やられたか！！」

戦闘機の前では無力である

爆撃機、攻撃機は被害が多かった

「モンタナが砲撃ほ始めた！！」

「砲のむきから狙いは大和だ！」

大和 -

ドオオオオン！！！！

「至近弾です！！」

船体が一瞬傾く

「敵艦の砲は相当強力と見た」

「おい！まずは確認が先だ！急げ！

それから攻撃できる奴はなにも考えず敵艦に攻撃しろ！！」

「長官！危ない！！」

その時！

「きゃあ！！」

クリスが倒れこむほどの衝撃であった

「くうつ！あれは!？」

「…TBF…アヴェンジャー攻撃機です！」

アヴェンジャーとは米海軍の雷撃機である

第二次、第三次ソロモン海戦、マリアナ沖海戦などに参加  
数々の日本艦撃沈に貢献した

「伊勢や隼鷹にも多数襲来です！」

ドゴオオ!!

またすごい音がした

そして、目撃者が叫んだ

「伊勢に魚雷命中!!！」

さらに大和に魚雷が3発命中した

「長官！」

「…輸送のほうは？」

「はっ！無事終了しました!!！」

「戦果は？」

「はい！敵の重巡1、軽巡2、駆逐艦1、輸送船3沈没、戦艦1、  
軽巡2中破、

エセツクス小破、モンタナ軽微、艦載機30機撃墜」

「よし、帰投しよう」

「ええ!？」

伊藤長官は帰投することにした

それは今の状況を見込んでの決断である

「我が連合艦隊は3隻とも損害をうけた

特にこの大和の損害は深刻である」

大和はすでに浸水し船体が傾き始めていた

もつとも注水すればまだ解決できるレベルであるが

「輸送はもうとつくの昔に終えた、敵主力部隊の

戦力削減にも成功した、なによりガリア艦隊に

深刻な損害を与えた、もちろん我が方の損害も深刻である」

「まさか：敵も近代艦艇をもっているとは思わなかった

こちへの艦載機はもう7機しか残っておらん、空母もこれ以上攻撃されたら沈む

大和や伊勢もだ、このまま攻勢をかけるのはあまりにも危険だと思っ  
「

「はい、それは自分も承知の上です

しかしここで敵艦隊を撃滅しなかったらガリアの国力的にもすぐに復活させます」

「では、こちらが全部の艦艇を失ったら？それは義勇軍崩壊の時でしょう」

「木造船なら週1のペースで建造できるがエセックスなどの

近代艦艇を相手するには不十分だ」

「今は攻勢をかけるよりも、一度身を引いて態勢を立て直すべきだと私は思うのだ」

こちらの損害を見込んで、伊藤長官の決断であった

その後、大和を旗艦とする連合艦隊と、レドウタブルを旗艦とするトリステイン空海軍

はアイルランドから身を引いた、この海戦は後にアイルランド海戦と呼ばれた

義勇海軍は…

大和・中破

伊勢・中破

隼鷹・小破

航空機、艦戦、艦爆7機以外全滅

という大損害をうける

ほとんどがモンタナとエセックスの艦載機によるものだ

まさかガリアが近代艦艇をもっているとは知らず、不意をつかれての大損害、情報部はこの2隻の存在に気がつかなかった

義勇軍はどうやら情報戦に負けたようだ

空海軍も戦闘に出した艦艇のほとんどを失う

だがガリア両用艦隊も大損害を出す

海戦の結果…

義勇・トリステイン軍は敵主力部隊の戦力を減らす事に成功  
またメインである上陸にも成功させ戦略的には勝利した

しかし戦術面では情報戦で破れ不意をつかれ

艦載機のほとんどを失い3隻すべてに損害が出た  
トリストイン軍に限ってはほとんどの船を失う  
戦術面では大敗した

もちろん全50隻の艦艇を持つガリア両用艦隊  
も大きな損害を受けた

今の状態ではとても作戦は続行できないと  
海軍は撤退を開始したそうである

一方の義勇軍は船舶を修理しなければならぬ  
それも保有する三隻の艦艇すべてを  
一時的に義勇海軍は水上作戦能力を喪失した

一方、アイルランドでは

義勇陸軍がアイルランド陸軍と共に、ガリア軍上陸部隊を向かえる  
ため、準備していた

小さな輸送船2隻のみがたどり着いたガリア  
8000人ほど上陸してくることが予想された



22・義勇軍聯合艦隊vsガリア両用艦隊(後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 23・陸自

その頃、アイルランドでは

「敵が降下してきた、しかしまだ攻撃してはならぬ」

「敵が上陸しある程度こつちまできたら砲撃を開始する」

義勇軍戦車10両と70名の歩兵、アイルランド陸軍2600名、  
トリステイン軍1000が  
ガリア軍8000名を迎え撃つため、待機していた

「攻撃開始」

「攻撃開始！」

その合図と共に一斉に義勇軍の  
攻撃が始まった

「敵だあ！！」

火縄銃や剣、槍など中世レベルの装備しか  
持たないガリア軍にとって戦車も機械化歩兵も脅威だった  
歩兵の攻撃だけでも多くのガリア兵が死んだ  
続いて戦車隊の攻勢だ

「よし！走れ！」

まず浩二の八号が  
敵の中に突撃した

「田口！踏み潰せ！」

「シエスタ！機関銃、あるだけ弾をぶつ放せ！」

「はい！」

八号の機動力を生かし、ガリア兵を駆逐していった  
走るだけでも武器になるのに今や射撃の名手となった  
シエスタが放つ機関銃の銃弾はかなりの高確率で敵兵に命中した

女は男にくらべて殺る時は堂々と殺るといっが  
まさにそれだろう

海軍よりも歴戦である陸軍は  
海軍よりも善戦した  
戦車を撃破できる兵器を  
ガリア軍上陸部隊は持っていなかった

ましては射程距離の短い銃、そして近寄らなければ攻撃できない剣・  
槍

戦車すら倒しうる最大の武器、メイジの魔法も射程距離が短いのが  
泣き所

射程距離が長く威力も比べものにならない近代の銃を  
使用する義勇軍歩兵の前には…大国ガリアの兵隊も無力であった

現時点では…

一方アイルランド軍の兵士達は苦戦していた  
旧来の白兵戦しか戦法がないのである

「ぐああ」

「敵に当たれ！大日本義勇軍に攻撃する隙を与えるのだ！」

アイルランド軍の任務は

戦闘ではない、義勇軍の手助けだった

八号（旭日号） -

カーン！

「被弾したようですな」

「この世界の銃なら後部でも貫通はできない、安心しろ」

ガリア軍が戦車に勝利するにはメイジが近寄って魔法で攻撃するか  
ハッチをあけて中の人間を殺すかだがどちらの戦法も  
重武装である戦車を相手にはお世辞にもいいとはいえない  
まともな対戦車兵器がないガリア軍は押されるばかりだ

「に…逃げろ！！」

とうとう撤退を始めた

しかし浩二は攻撃をやめさせなかった

確実に浜まで追いやつてから攻撃停止を命じた

「中川さん！敵は海に敗走しました！」

シエスタが叫んだ

すると浩二は無線ではかの戦車、そして歩兵に連絡した

「よし！攻撃をやめろ！」

・  
・  
・

陸軍は、ガリア軍を相手に大勝利した

上陸部隊がS35戦車や対戦車兵器を装備していなかったおかげだ  
ろう

2日後、アイルランドで待機していた

義勇軍の元に、輸送船でやってきたクリスが訪れた

「やってくれたか、礼を言おう」

クリスは笑顔だった

そして師匠から習ったのか礼儀正しい

浩二達も敬礼で答える

「さて、このまま返すわけにもいかないし

アイルランドでも観光しますか？」

「そうですね、クリステイナ姫がそうなのであれば

お供しましょう、それに、貴女が言っておられた戦車が気になり

ます」

「ふ、流石は軍人と言いたい所だ、いいだろう

師匠が持ってきた日本の兵器とやらを見せてあげよう」

ほかの人たちがアイルランド観光を楽しんでいる最中

クリスに連れられ、浩二は師匠が持ってきたという場違いな工芸品がある

師匠の格納庫へと行った

「ここですね」

「そうだ」

そのとき、突然クリスが手を動かす

「!?!」

「?」

浩二は不思議そうな目で見た

「…すまぬ、驚いたか？」

「まあ」

なんなのかわからない

そこでクリスがなにをしたか言った

「開錠したただけだ」

「そうですか」

二人は暗い格納庫の中へ入っていった  
その時クリスがこんな事を聞いてきた

「…そういえば浩二とやら、お主は剣を使うのか？」

「ん？」

浩二はなんかあった時の為に恩賜の軍刀を携帯していた

「まあ、弾が切れればこれで戦います」

「そうか、腕前は？」

「一応自信はあります」

「そうか、私は日本人の剣使いと出会ったとなんかうれしい」

「そうでありますか」

まったくの余談であったが

クリスにとっては嬉しかった

「これが師匠がもってきた鉄の馬だ」

「…日の丸…でも見た事ない戦車です」

たしかに日の丸のマークがあり

日本の戦車だとは判別できる  
ただし車種はわからない

「すごいな、主砲はタイガー戦車よりもでかい」

「師匠はこれを61と呼んでいたな」

この戦車は陸上自衛隊61式戦車  
第1世代主力戦車に分類されており  
戦後初の国産の戦車であった

主砲・61式52口径90ミリライフル砲

副武装・7.62ミリ機関銃M1919A4

12.7ミリ重機関銃M2

装甲・砲塔114ミリ、車体55ミリ

最高速度・45キロ

乗員・4名

重量・35トン

「こいつは…ヨルムンガントと対等に戦えそうだ…」

確かに61式戦車ならヨルムンガントの装甲を貫通出来るだろう  
砲も日本軍時代の物りも長い、しかも90ミリ、威力はそうと高  
いはずだ

「これ、持ち帰ってもいいでしょうか？」

「かまわん、私には師匠の刀だけでも十分だ」

「…ありがとうございます」



61式戦車は撤退時、がんばって搭載され  
トリスティンに運ばれた

だが、新たな課題ができた、61式戦車の砲でも撃てる弾を生産す  
る必要があった  
それに戦車兵を増やす必要もある

次回は敵国

(ガリアやゲルマニア)の様子

### 23・陸自（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 24・ゲルマニア

一方、キュルケの祖国、ゲルマニアでは…

1人の男が自宅で馬鹿笑いしていた

「ワハ…ワツハハハ!!!」

なんとわざとらしい笑いだろう

チヨビ髭に七三分けのその男、どうやって

ハルケギニアにきたかは不明である

ドイツ総統にして現在ゲルマニア総統であるアドルフ・ヒトラーである

「国民はワシを称える！祖国ドイツのようだったゲルマニアは今やこの世界有数の軍事力を誇る！

流石はゲルマン民族！我がドイツと同じ血を持つものの国！」

「町では将校たちのホルスト・ヴェツセルが大音量でながさされている!!!」

「ワハ、ワハハハ!!!」

ヒトラーは大変、機嫌がよかった  
発展するゲルマニアに喜んでいた

実際に町では…

「Die Fahne hoch! die Reihen dic  
ht geschlossener!!!」

このようにゲルマニアの将校たちや

民衆達はホルスト・ヴェッセルを各地で合唱した

ゲルマニアはかつてのように、大帝国としての威厳を取り戻しつつあった

「Sieg Heil!」ジークハイル

1人がこう叫ぶと回りの人たちも勢いよく

「Sieg Heil!」ジークハイル

と叫ぶ、もちろん、ヒトラーのせいか

直立の姿勢で右手をピンと張り、一旦胸の位置で水平に構えてから、腕を斜め上に突き出す「ナチス式敬礼」も健在だ

元々はローマ式敬礼である、ナチス式はそれを真似たものである

ゲルマニアが国家元首にここまで熱狂的になったのは

今回が始めて、ヒトラーはゲルマニアでドイツ以上に人気となった

もちろん、以前と違い、ゲルマニアの軍隊が行進する時は

バーデンヴァイラー行進曲が使われるようになった

新たに新設された空軍ではルフトバッフェ行進曲が使われた

街のあちこちにハーケンクロイツが垂れ下がる

行進する軍人もゲルマニア軍のものからドイツ国防軍のものになっていた

少年達は憧れ、ジークハイルと叫び敬礼する、もちろんナチス式で

ドイツにはヒトラーにたくさんの側近がいて

有能な人から無能な人まで様々な人がいた

ゲルマニアでは、総統の最も優秀な側近は

男性ではなく、実年齢よりも幼く見える少女であった

「総統、そろそろ演説の時間なのです」

エリカ・フォン・マンシュタイン、某ゲームのドイツ第三帝国がモデルである

さらに元を辿ればエーリッヒ・フォン・マンシュタイン元帥がモデルだ

プロイセン貴族出身でゲルマニアの指揮官である

ヒトラーのすぐ隣で働きまた陸海空軍を指揮している

戦争に関しては無能である総統を支援する

天才少女である、また、エリカは国民からの支持率も高い  
ちなみにメイジである、一応魔法は使える

「おう、すぐに行く」

ヒトラーとエリカの出会いヒトラーがハルケギニアにきたばかりの頃だった

このヒトラーは別世界のヒトラーで1939年、ポーランド侵攻と共に突如消えた

実はハルケギニアに飛ばされていた

ハルケギニアに来て2日後、さまよっている所を貴族メイジであるエリカに助けられ以後、共に行動する

家が政府に迫害され政府に反感を持っていたエリカと

ドイツに相当するゲルマニアの実態を知って怒ったヒトラー

は協力、闘争を行いつつ各地で演説、同志を増やしていった

ついにはクーデターを起こし勝利する、その後はゲルマニア総統として

活躍、年々低下する国力の回復と軍事力の増強

そして最終的には、生存圏確保を目指し大ゲルマニア帝国を打建てん前皇帝が支持率が圧倒的に低かったのとは違い

ヒトラーの支持率が高い、その影にはエリカの活躍もあった

・  
・  
・

ヒトラーの演説は本日も

歓声が起こった

その日の夜 -

「エリカ、どうだ？今の軍隊の実力は？」

「はい、総統の言うとおりでしたら、地球という世界との連絡も取れるようになって、まだ政権をとってから半年ほどだといふのに

すでにこの世界ではかなりの軍事力を手に入れました」

「さらに聖地と言つところの近くでは地球という世界の兵器が沢山てにはいります

この調子でいけばあと2ヶ月で開戦できるのです」

ヒトラーはついさつき義勇軍が知った、日食か月食で

地球と行き来できるという事を知っている

なぜか知らないが彼らは1930年代のドイツに行けた

そこで得た技術を元にゲルマニアに多くの工場を建設

そこで兵器を生産しているという

なんでもあと2ヶ月で戦争を開始できるというのだ

ちなみになぜか何回行っても1930年代ドイツに

飛ばされてしまう

「2ヶ月、すると来年だな」

「それまでしばらくお持ちくださいなのです」

さらに、同盟国についても話し合われた

「戦争はガリアと共に行う事になるだろう

だがはつきり言えばガリアはあまり強くない」

「たしかに聖地付近で発見したであろうフランス製の戦車を多く持っているが

指揮官に無能が多い、最初の目的であるトリステインは傀儡国家であるアルビオンと組む

しかしガリアの隣であるロマリアとも同盟を結び最悪東のモスクワとも同盟を結び

ガリアを総攻撃する、下手をすれば我が軍だけで戦う事になるだろう」

「その点も配慮して、軍拡中なのです」

「それに軍は總統から私へ命令、そして私から軍に命令を出すのですから大丈夫なのです」

「ならば安心だ、がんばってくれエリカ」

「はいなのです！」

ちなみにゲルマニアもかなりの兵器を持っていた

この時、情報部の情報よりもかなり多い35t、38t、1号、2号など軽戦車を30両

3号戦車を15両持っていた

規模で言えばガリア以下義勇軍以上の機甲部隊である  
歩兵も一個大隊が機械化されている

火炮は主に15cm sFH 18が40門ほど  
海軍は流石にまだ弱小である、木造船が殆どだが  
2型Uボート2隻を保有していた、ゲルマニア海軍最強の船と言え  
よう

空軍も、すでに義勇軍以上の戦力を持っていた

Ju87スツーカーを10機、Do17を3機、He111を1機、  
Bf 109Eを8機、Bf 110Cを5機保有  
パイロットはヒトラーの指令で地球のドイツから引つ張り出してきた  
という

1939年時点のドイツ空軍は世界で最も訓練され装備も充実して  
いる空軍だった

その空軍の飛行機、パイロットを使用しているゲルマニア空軍の戦  
闘力は

義勇軍航空隊より上であろう

もちろん、今までの装備しかもたない部隊はまだたくさんある  
だが短期間にこれほどの戦力を身につけたのはヒトラー、エリカの  
頭脳と

ゲルマニアの人々の理解…というより、元々ゲルマニアは他国に比  
べて  
ちよつと優れたものが造れた、その頭脳のおかげだろう

あちこちに軍需工場も出来て義勇軍よりも兵器の生産ペースが速い



のも理由だろう

ドイツの飛行機は航続距離が短い、というのが一番トリステインから近い

基地ならば護衛戦闘機もつけれる、つまりD o 17とH e 111によるトリスタニア爆撃も

可能なのである

今はまだ、ガリアよりも規模は多少小さいが一番強敵になることが予想される国であった

ただでさえ頭のよいゲルマニア人に科学技術というものを与えたらどのような兵器を開発するだろうか？

しかもハルケギニアの人間は魔法も使える

とんでもない超兵器が、義勇軍ではなくゲルマニアに生まれるかもしれない

## 24・ゲルマニア（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ  
なおエリカは某ゲームより

## 25・ガリア

同じ頃、ガリアでは…

無能王と知られるジョゼフ1世が部屋で笑っていた

「ツハハハハハハ！」

「そうか、トリステインの奴らと相撃ちか」

「はっ、誠に残念ながら、敵艦隊の撃滅に失敗しました」

「しかも…アイルランドにはトリステインにいる義勇軍の兵士がいまして失敗したとの事です」

彼はクラヴィル、ガリア両用艦隊総司令官である

彼のガリア両用艦隊が数で劣る義勇海軍と相撃ちだったことをジョゼフに報告

自分は首をとばされると思っていた

だが…

「そうか、愉快だ！戦争はそうでなくては面白くない」

「これから徐々に…反抗してゆけばよい、私のガリアは必ず勝利へと向かっている」

彼は戦争を遊びとしか思っていない

トリステインとの戦争なんて暇つぶしみたいなものだろう

「トリステイン、アルビオン、ロマリア、アイルランド、クルデン  
ホルフ…」

これらの小国を総なめにしたら次は今こそ友達だが…  
私の計画どおりヒトラー君のゲルマニアと戦争する」  
「おそらくゲルマニアがこの世界で最も手ごわい相手だろう  
ヒトラー君の軍隊は魔法とも違う強いものが数あるからな」  
「君、私の心は広い、今までどおり任務を遂行したまえ」  
「はっ！」

クラヴィルは部屋を去った  
次にシエフィールドが訪れた

「…なんでもトリステインにシャルロットがいるそうです」  
「なに？あいつはなにをしているのだ？」

「さあ？ガリア人だということをいい事に情報提供でも  
しているのでは？」

「…面白い！こちらも偵察に行け  
もつといえは破壊工作をしてもいいぞ」

「わかりました」

シエフィールドが去った  
その後ジョゼフはハルケギニアの地図を出した  
今ある国家にすべて、ガリアの国旗を描いて

そして笑った

「ツフツフ…将来はこうなるのだ…」

世界征服を企んでいるのだろうか  
すべての国にガリアの国旗を描いて喜んでいた  
彼の戦争案はこうである

- ・まずゲルマニアと手を結びハルケギニアの国々を総なめにする
- ・そして大国と化したガリアがゲルマニアと戦争する
- ・最後に勝利するのはこのガリアである

子供が考えそうな程度であった

少年のまんま成長するところなるのであるう

ではここでガリアの実力がどれぐらいなのか  
明かすことにする

ガリアは非常に国力が高い

その規模はハルケギニア1と言っても過言ではない

優れた魔法技術を持っておりメイジの質は他国より高いという

王都リュティスは広大な面積に30万の人口を誇る

エギンハイムはシュバルツバルトと呼ばれている森に覆われており

現在同盟国であるゲルマニアの軍隊も駐屯している

ソナムからアルデンヌ高原にかけてガリアはとてつもなくでかい要塞を

10年以上も前から造っていた、マジノ線と呼ばれるこの要塞は

トリステインとの国境部分全体に広がっていた

人員300万のうち50万がここにいるという

ジヨゼフ自身この要塞を「難攻不落」と呼んでいる

サン・マロンには両用艦隊の大要塞がある

ここに両用艦隊の戦力のほとんどがあった  
エセックスやモンタナもこのサン・マロンに停泊している  
また、この基地には研究所たるものがあり「実験農場」と呼ばれている

ここでヨルムンガントの製造やフランス戦車、アメリカ軍艦の研究が行われている

固定化の魔法がかけられ整備の必要はなし

弾は中にあつた弾を十分に実験農場で研究され

生産が可能であつた、現在ソミュアS35 シャールB1重戦車b

is オチキスH35軽戦車

ルノー D2中戦車などフランス製戦車が70両ある

どれも国を挙げての聖地付近探索で発見されたものばかりである  
規模はゲルマニアや義勇軍を圧倒している

しかも第二次大戦期、フランス軍はドイツ軍にあつさり敗れたが  
戦車事態、悪いものではなかつた

ドイツ軍戦車に対抗できる火力、防御力、機動力を備えていた

特にS35は当時の戦車の中でも総合的に優れていた

それなのに負けたフランス軍はよっぽど戦略的に甘かつたのだろう  
戦闘結果だけで国の兵器の質は決めるものではない

現に日本は当初、お粗末な戦車でソ連軍戦車とまともに戦い

大東亜戦争ではおされつつも連合軍戦車相手に戦いそして勝利した  
ケースもあつた

ガリアの泣き所は空軍力が低い所だ

両用艦隊と竜騎士隊、そしてエセックスの艦載機以外にまともな航空兵力はない

だが、それがトリストインにとっては唯一の救いである

またトリステインと違い資源が豊富で

枯渇する事はまずない

3年でも4年でも戦争を続けられる国力を持っていた

そして、イザとなれば15歳〜60歳の人間すべてを根こそぎ徴兵するという

ジョゼフの考えもあった、これだけでも相当の戦力になる

ゲルマニアにしろ、ガリアにしろ、手ごわい相手であることは間違いない

## 25 ガリア（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ



## 26・トリステインの同盟国

今回も本編とずれて別な話をする  
トリステインの同盟国についてだ

現在、トリステインは3ヶ国の同盟国をもつ  
トリステインの傀儡政権であるアルビオン  
東の大国モスクワ  
そして大西洋の島国アイルランドだ

アルビオンはあれから復興、今となつては30万の兵士を持つ  
ロンドンの政策で地理的に航空兵力増強を目指していた  
ただし飛行機を造る能力がない為、才吉に頼み、震天飛行機や自身  
が立ちあげた  
平賀飛行機に航空機製造を依頼、二社は隼二型戦闘機を5機供与した  
数ではトリステインよりも多い軍隊を持っている  
人口も多いので自ら志願して義勇軍に入る者もいるなど、トリステ  
インとの関係が最もよい国家だ

続いて東のモスクワ大公国  
財政難に悩まされていたがトリステイン（特に大日本義勇軍）との  
取引が盛んに  
なりだいで解消された、産業革命期の技術と工業力を持っていたこ  
の国に

義勇軍は技術を提供、また中川重工で製造された九五式軽戦車が3  
両送られている

元々軍事力は高い、軍人だけでも100万はいるという

冶金技術が高いため、将来的にこの国でも義勇軍兵器の生産がされ

ることになっている

また、近代兵器の開発も行われている、派遣された技術者と共に才人が地球から持ってきた資料を参考に多連装ロケットランチャー「カチューシャ」を

開発中、コルベールが開発した「空飛ぶ蛇くん」を改造したロケット弾を搭載予定

またトラックに搭載される予定である為自走式である  
この点では義勇軍より優れる事になる

ちなみに国歌がソビエト国歌に酷似している

もう一つ、クリスのアイルランド

一番最近同盟を結んだこの国はお世辞にもあまり強い軍隊は持っていない

しかしトリステイン・アルビオン・モスクワ・義勇軍支援の下、復興作業が

行われている、来月中戦車2両、軽戦車1両、戦闘機2機が竜のかわりに送られる予定である

トリステインの同盟国の中で最も頼りになるのは

おそらくモスクワだろう

国力も4ヶ国の中で群を抜いている

また技術も高い、資源も腐るほどある

ゲルマニアのUボートに輸送船を撃沈されなければ  
トリステインは資源に困る事がなくなる

今の状況から春奈はトリステイン・アルビオン・モスクワ・アイル

ランドによる同盟国を

「連合国」と呼び次第に義勇軍内でそれが定着していった  
対するガリア・ゲルマニアによる同盟国は「枢軸国」と呼ばれ定着  
していった、

ハルケギニア史上今まで類を見ないこの両陣営の対立  
そしてすでに起こり始めた戦争

ハルケギニア戦役と呼ばれる戦いはもう始まっていた

## 26 トリステインの同盟国（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 27・クルデンホルフ侵攻

さっきの話から一ヶ月、両陣営の軍隊は  
戦争の準備を進めていた

この時、とんでもない同盟がされた  
なんとロマリアが枢軸国側に立って戦うと宣言した

解瑠魔弑亜、我利亞、露鞠亜の三国

(すべて義勇軍の当て字)

この同盟は「解我露三国軍事同盟」という名前だ  
すぐにこの情報は情報部より送られそこそこの強さを持つロマリア  
が枢軸国側に立った事は連合国にとってショックであった

これによって、現時点で以下のように勢力が別れた

連合国

- ・ トリステイン王国
- ・ アルビオン王国
- ・ モスクワ大公国
- ・ アイランド王国
- ・ 大日本義勇軍

枢軸国

- ・ ガリア王国
- ・ 帝政ゲルマニア
- ・ ロマリア連合皇国

唯一の救いは東の地の事があまりわかっていない為  
大日本帝国に相当する国家の参戦の可能性がないことである

年が明けても、両軍は軍拡を進める、2ヶ月で義勇軍は総力をあげてかなり軍事力をあげた

1月の時点での義勇軍の戦力は以下の通り

陸軍 -

ラ・ロシエールに第1師団（第1歩兵連隊100人、第1砲兵連隊、第2戦車連隊など）

ダングルテールに第2師団（第2歩兵連隊80人、第1戦車連隊、工兵大隊など）

ラグドリアン湖に第3師団（歩兵50名、戦車中隊、砲兵小隊、工兵連隊など）

陸軍兵器配置 -

戦車、装甲車 -

第1戦車連隊 - 13両（軽戦車5両、中戦車7両、重戦車1両 - 場所 - ダングルテール）

第2戦車連隊 - 11両（軽戦車7両、中戦車4両、『内61式1両』 - 場所 - ラ・ロシエール）

第1戦車小隊 - 5両（軽戦車5両 - 場所 - ラグドリアン湖）

火砲 -

第1砲兵連隊 - 19門

・高射砲小隊5門

第1砲兵小隊 - 野砲5門

始めて師団というものができた

もちろん規模的には師団にはほど遠いものの

どうにかして第3師団までつくることができた、規模は小さいが

海軍 -

連合艦隊

第1艦隊

・ 大和（修理中） 伊勢（修理中） 隼鷹（修理終了）

艦載機15機（戦闘機5機、爆撃機5、攻撃機5機）

一時期大変な航空機不足に見舞われた海軍であったが

それを乗り越え二ヶ月後には15機まで回復してみせた

また空母隼鷹の修理が完了し水上作戦能力の一部が回復した

伊勢の修理もあと数日で終了する予定だ

独立航空隊 -

（海軍の航空兵力不足を補う為艦載機タイプがたまに海軍へ派遣される）

第1航空隊 - 場所 - 現在ラグドリアン湖

・ 航空機17機（隼6機、飛燕3機、震電1機、九九式双発軽爆撃機5、零式輸送機2機）

新たに隼、飛燕、そして新型の九九式双発軽爆撃機が増えている

九九軽爆が採用されたのは戦闘機並の速度、良好な操縦性、稼働率の高さ

そして実戦での活躍からである、爆弾は一発しかもってけないが

それでも重要な基地を攻撃するには十分だった  
なお第1航空隊は前線で戦うためラグドリアンに転進した

第2航空隊 - 場所 - ダングルテール -

・航空機13機（零戦3機、陣風1機、bf109F2機 F6F  
1機 九三式中間練習機5機、零式輸送機1）  
主に海軍や震天飛行機ダングルテール支店があるダングルテールの  
防空にあたる

零戦などの艦載機はたまに海軍に貸し出しされる

第3航空隊 - 場所 - ラ・ロシエール -

・航空機8機（隼3機、零戦3機、五式戦闘機2機）  
軍司令部や中川重工、平賀飛行機本店、震天飛行機ラ・ロシエール  
支店がある

ラ・ロシエール上空の防空が主な任務  
なお五式戦闘機は震天飛行機が実際に戦争末期の陸軍航空機である  
五式戦闘機を複製したもの

第4航空隊 - 場所 - トリスタニア -

・航空機10機（九一式戦闘機6機 i1-2、4機）  
タリスタニアの空を守る組織がほしい  
というアンリエッタの要望で急遽設立された  
その為、生産が簡単である旧式の九一戦、そして大量生産向きのi  
1-2攻撃機が配備され

第1航空艦隊 - 場所 - ラ・ロシエール -



戦艦 -

リシユリユ-級3隻

(武装:五式38糎連装砲2基6門(中川重工開発)空飛ぶ蛇くん)

主な艦 - リシユリユ-、ジャン・パール、クレマンソー

次級 - ダンケルク級

ダンケルク級1隻

(武装:五式38糎連装砲3基9門、空飛ぶ蛇くん、五式57糎対艦機関砲(モスクワ製、義勇軍名))

主な艦 - ダンケルク

竜空母 -

ヴュセントール級空母

(武装、特になし、艦載機が武器)

主な艦 - ヴュセントール

主な艦載機 - 九〇式艦上戦闘機、ソードフィッシュ

偵察艦 -

オストランド  
東方級偵察艦

(武装、空飛ぶ蛇くん、五式57ミリ対艦機関砲(後付け)おおいなる槍(88ミリ高射砲))

オストランド  
主な艦 - 東方

安価で生産性にもすぐれる空飛ぶ船を航空隊は

正式採用、現在上の船が就役している

生産期間が二週間に伸びたがこれは新兵器の影響だろう

新たに開発された五式38糎連装砲や五式57糎対艦機関砲は高度で生産性に欠ける、二週間でギリギリ戦艦1隻に搭載できるぐらいの量を造れるぐらいだ

このように、あれから2ヶ月

あちこちの軍隊は軍備を拡大していった

そして、本格的な開戦の鍵となる戦いが始まるうとしていた

今回はゲルマニア・クルデンホルフの視点でご覧になっていたきたい

ゲルマニア、総統宅

「おーい！エリカ！どうじゃい！？準備は進めてくれたか？」

「もうばっちりなのです、いつでも戦えるのです」

ドイツと、ここの工場で兵器を生産、既に戦車100両

潜水艦3隻、航空機60機を保有していたゲルマニア軍、戦争の準備は整っていた

さらにもう二箇所、工場ができた為、さらに生産ペースが上がる

「ワッハハハ、だがエリカ、我が軍は一度も実戦を経験していないぞ  
本番の前に練習相手になる国と戦争しないか？」

「そうですね、じゃあ隣のクルデンホルフと戦争しましょう

あそこは親衛隊だけで正規軍はいない国ですから

練習にはもってこいなのです」

「ようし、確か空軍力だけやたら高い国だったな  
我がルフトバツフェの飛行機で制空権を確保してその後陸軍を送  
れ」

「はいなのです」

ヒトラーとエリカの勝手な

話し合いでクルデンホルフへ宣戦布告する事になった

ちなみにアルビオンのロンメルはドイツ軍だったのだが  
別世界ではさいしょっからヒトラーに忠誠など誓っていなかった為  
裏切りはしなかった

翌日、さっそく宣戦布告がクルデンホルフの大公家に届いた

「…なんたる事だ…」

「ど…どうしましょう…」

「…我が国の軍事力ではとてもゲルマニアに  
対抗する手段はない」

「しかし…」

「わかっておる、抵抗はする  
ルフトバツフェアーリッター  
空中装甲騎士団の総力を挙げて敵に抵抗しよう」

「それしかありませんね」

「それで…我が国に勝ち目は？」

「ない、それだけは断言できる」

「私は、もしもの場合、軍隊の少ない所を変装して通り  
トリステインに亡命するつもりだ」

この国から一番近い

わりと有効的な国はトリステインしかない

今のトリステインには強力な軍隊が駐屯しているというから  
そこならずこしは安心できると思った

「大公…」

「ヘルマン、いつか共に、この地の奪還を目指そう」

「はい…」

その後、大公は、空中装甲騎士団に総力を挙げて

最後の一兵まで戦えと言い残し、国を去った

いつかこの地を奪還する為、まずはトリステインへ亡命しようとした

そして…

「敵だああ!!」

1人の騎士が叫んだ

ルフトバツフェがやってきた

即座に皆、自分の竜に乗り

ゲルマニア軍の飛行機を迎撃しにいった

その頃、既に首都への爆撃は始まっていた  
ハルケギニア初の無差別爆撃である

この爆撃にはDō17やHe111が参加した  
護衛機はない、竜相手には撃墜されないという  
考えだ

一方、竜騎士達はゲルマニア空軍と戦っていた

「速い！」

始めて見る飛行機

その速さと重武装さに圧倒されていた

ダダダ…

「ぐあ！」

空中装甲騎士団は重厚な甲冑を着用  
していたがそれも機銃の前では無力  
戦闘機はおるかスツーカーにすら勝てなかった

「くそ！あの竜！急降下してなんか落して魔法で爆発させるぞ！」

「なんて奴らだ！」

その時、彼らの後ろらbf110がやってきた  
bf110は機銃を発射

ダダダ…

「ぐあぁー!!」

速度の遅い竜など

戦闘機にとつてかっこうの餌食であった

その頃、

「総統！あつさり制空権を確保したとの事です」

「よし、次は陸軍だ」

「はいなのです！」

続いてゲルマニアは陸軍を送ったが

正規軍を持たないクルデンホルフ、抵抗するのは民衆のみだ

…こうして1日でクルデンホルフの首都は陥落、また大公も亡命

してしまっているため、クルデンホルフに残った高官が降伏を宣言

クルデンホルフは僅か1日で敗れてしまった

次回はこの5日後である

## 27 ヴルデンホルフ侵攻（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 28 大公亡命と新たな同盟国

5日後…2人の男がアンリエッタ女王の前に姿を現した

「あら…貴方達は？」

「…」

金持ちでトリステイン貴族に金を貸しているクルデンホルフ大公だが  
そんな彼も王家には頭が上がらない

「我がクルデンホルフは完全にゲルマニアにやられてしまいました！  
お願いです！あの地が再び我々の領土になるまで！ここに身を潜  
めさせて

ください！！」

それまで中立だったクルデンホルフが  
ゲルマニアにやられた事はすぐにハルケギニアの国々に  
伝えられそのことはアンリエッタも知っていたがまさか大公が生き  
ているとは  
思ってもいなかった

「あの、まずは…おちついてください」

「は…はあ…」

アンリエッタは興奮する大公に  
とりあえずおちつくよう命令した  
大公がおちついた所で再び話が始まった



「あの、ゲルマニアがクルデンホルフに侵攻したというのは私もし  
っております

ですが、本当に一日で降伏したのですか？」

「はい」

「あのハルケギニア有数の空軍力を持つ国が…」

「はい…」

アンリエッタは絶望感にみまわれた

あのハルケギニア有数の空軍力を持つクルデンホルフが

僅か1日で敗れた、今までのゲルマニアなら1週間は持ちこたえる  
事ができるほどの戦力を備える空中装甲騎士団が

アンリエッタは不安になった

すごい装備をしている大日本義勇軍の存在もあるが

はたしてクルデンホルフを一日で屈服させるような軍隊相手に  
勝てるのだろうか

…でもそのまえに、まずは大公たちを

どうするか考えるほうが先であった

「…いいですよ、身を潜める事を許可します」

「ほ…本当ですか？」

「はい、ただしこの後の御前会議で可決となれば…です」

「あ…ありがとうございます！」

そして、予定通り御前会議が行われた  
いつものメンバーで

今回は「ゲルマニアのクルデンホルフ侵攻について」である  
そこでアンリエッタは大公亡命の話題を話した

「…そういえば、クルデンホルフ大公が  
我が国に亡命してきました」

「本当ですか女王様？」

「はい」

一同の表情は変わった

「あの、私としては、亡命政府を樹立させてあげたいのですが  
どうですか？」

この件については反対0でそく可決となった  
別にメリットはないがこういう場合は匿ってあげるのが  
礼儀であろうと皆思っていた

その翌日、今度は別な国から大使がやってきた

「女王陛下下！」

と勢いよく話しかけたのは1人の

真面目な服をきた中年男性だった

「あら？貴女は？」

「はい！私はユーゴ王国の大使であります！」

「ユーゴ王国？ですか？」

「はい、クルデンホルフより南にあります王国です！」

地球というユーゴスラビアだろう

クルデンホルフは地球でいうとオーストリアの場所にある

「僅か3日でレコン・キスタを制した小国があるという情報を  
きいてやってきたかぎりです！」

「実は今！我が国は絶対絶命のピンチなのであります！」

「今、なにかと熱いゲルマニアがクルデンホルフを征し

これによってガリア、ゲルマニア、そしてロマリアの

なにをするかわからない国三国と国境が隣り合わせになってしま  
いました！」

たしかにそれは大変である

「我が国はあくまで中立の立場でしたが

これには流石に危機感を感じました、いつこの三国が侵攻してく  
るかわかりません」

「もとの時、陸軍7000人、両用軍2000人、竜空軍58人  
という兵力ではこの三国のどれにも

抵抗できません、そこでトリステインの実力を評価したうえで同  
盟を結びたいのです」

アンリエッタはすぐに答えた

「ええ、こちらも味方を増やしている所なので丁度よいです  
僅かな戦力でも、力になってくれるならそれだけでも私は嬉しい  
です」

「ありがとうございます」

敵を増やさず味方を増やす政策をとっている  
アンリエッタにとって大使が同盟を結ぼうとして  
やってくるのはむしろ大歓迎であった

ユーゴは国力も高くなく資源もあまりなく軍事力も決して高くはな  
いが

かつてハルケギニアで3番目の航空兵力を持つ国であった  
また冶金技術が非常に高く良質な刃物を多く装備し  
白兵戦では最強と言われている

こうして新たに連合国に、ユーゴ王国が  
加わる事になった

ちなみにユーゴ王国の主な組織・機関は（大使の説明による）  
王立・

ユーゴ陸軍士官学校・陸軍の士官学校、ほかの国と違い平民でも簡  
単に入学できる

航空士官学校・両用軍、竜騎士隊の士官学校、同じく誰でも入学可能  
ユーゴ王立図書館・王立の図書館、トリストインの図書館ほどでは  
ないが

かなりの数の本があるそうだ

ユーゴ王立研究所 - 魔法のみならず、場違いな工芸品についての研究が行われている

軍事 -

- ・ 陸軍 - ユーゴ軍の主力、規模は小さいが白兵戦最強と言われている
- ・ 両用軍 - いわゆる海と空で行動できる空飛ぶ船の組織、大型艦1隻と小型艦3隻を保有
- ・ 竜空軍 - 竜騎士による空軍、非常によく訓練されており義勇軍が現れるまでは

アルビオン・クルデンホルフに続き3番目に強い竜騎士隊だった

小国ではあるものの

なにかと優れた組織・機関をもっている

28 大公亡命と新たな同盟国（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## 29・新兵器

昨年、中川重工に陸軍から  
ある兵器の新開発を行うよう命令された

「どうも、おひさしぶりです」

「おまえさんか、今日はなんのようじゃ?」

「はい、新型の戦車の開発をお願いしたいのです」

「ほう…新型戦車か」

浩二は説明した

そう、八号やチハの火力ではヨルムンガントやフランス軍戦車隊を  
相手

するには力不足すぎるのであった

浩二の要求は以下の通りだ

種類 - 中戦車

装甲 - 30〜50ミリ

主砲 - 75ミリ

行動距離 - チハと同レベル

速度 - 40キロ以上

これだけの性能があれば  
フランス軍戦車に対抗できると浩二は考えた

「うむ、この程度の戦車なら  
直ぐに開発して量産できるわい」

「ありがとうございます」

こうして、仮称『六式中戦車』の開発が行われ始めた  
性能的にも第二次世界大戦初頭くらいまでならば十分通用するレベ  
ルである

こうして3ヶ月が経過した今年、中川老人は3人つれてこいと言っ  
て浩二を呼んだ

4人乗り戦車であるため浩二のほかに3人必要だった

そして、適当につれてこられたのは

自分の戦車の乗員である田口・シエスタ、そして女の子だがミリタ  
リーに詳しい春奈だ

ちなみにルイズはアンリエッタと呼ばれ、用事があるため今日は  
ダングルテールの中川邸には不在である

「はっはっはっ 皆さん喜びなさい

ちゃんと要求どおりの戦車ができましたぞ」

「三式中戦車を参考に造ったからすぐにできたわい！」

「それで、実際の所は？」

「心配せんでも、要求どおり、いや、要求以上の性能は出る

75ミリの主砲はもちろん正面装甲は50ミリ、側面が30ミリ、  
後部が25ミリで



しかも現代日本の技術をつかったからチハや八号なんざとは比べ物にならないぐらい丈夫じゃ」

その言葉を聞いて一同は安心した

皆現代日本に行ったのでそのすごさは理解しているつもりだ

「そうじゃ、機動性も求められてたんじゃな

心配せんでも最高速度は47キロ、S35より速いぞ」

「強度的にはS35と同等、火力、機動性はそれ以上じゃ」

外見はほぼ三式中戦車で正面装甲は傾斜になっている

乗員は4人でおさえることができた

ちなみにこの六式中戦車にも「チル」という称号もある

このほかに、ガリアやゲルマニアに対抗すべく

新型兵器の開発やとつくのむかしに開発されている兵器の生産を行った

九二式重機関銃や九九式短小銃、一〇〇式機関短銃、さらに八九式重擲弾筒などの

旧軍兵器からこの場で開発された兵器まで沢山あった

…というのが実は義勇軍は兵員不足でこれほどの兵器は余ってしまうではどうしているのか？それは同盟国に安く売っているのである

特にユーゴ王国やアイルランド王国など

弱小である国に多く売られた

ユーゴ王国は場違いな工芸品の研究機関があり知識があつたためか今月にも一個連隊が機械化していた

ただし、配備された部隊からは不満の声もでていた

取り扱いが難しいうえ、整備性にも欠けるというのだ

日本の兵器は構造が複雑であった

中川重工

「やっぱ、旧軍兵器じゃちょっと不満が多かったのじゃろっか？」

「やはり整備が難しいのでは？この世界には科学という言葉もありませんし」

「じゃあ…カラシニコフでも大量生産したほうが実用的というわけじゃな」

「そうですね」

結局これらの旧軍銃の生産は打ち切られ  
AK-47の量産に移る事になった

一方、平賀飛行機・震天飛行機では  
新型戦闘機の開発に熱心であった  
トリスタニアに配備された九一式戦闘機はお世辞にもあまり高性能  
とは言えず

特に最近ゲルマニア軍がbf109Eを装備している事を知り空戦  
をした場合圧倒的に  
劣勢となる、そこで2ヶ月前よりかなり速いスピードで開発が進め  
られた

少なくともbf109Eを越える必要があった、お金もあまりかか  
らなく

かつそこそそ高性能である妥当な戦闘機を探した

そこで出てきたのがイギリスのハリケーン戦闘機である  
確かに元の機体はbf109Eに比べ劣る物であった  
しかし、新たに高性能機を開発するには時間も金も人も必要であった  
ならばドイツ軍機迎撃に活躍したこの安上がりな戦闘機を改良しよ  
うではないかということに  
なり開発は急速に進んだ

現代日本の技術を使い発動機の大きさを変えず出力を上げ  
多少機体の形を変えるなど、きわめて単純な改造だけが行われた  
元の機体はイギリスに余っているものを購入、今年に入ってから平  
賀社と震天社、  
どちらを採用するか審査が行われた

平賀社のものは速度はbf109Eを凌いでおり航続距離も長かつ  
たが  
が運動性能はハリケーンそのものであった  
震天社は速度こそ劣るが運動性能は上昇、また平賀社よりも加速、  
上昇に優れていた

5日間という短期間の審査の結果、震天社のものが選ばれた  
今から2日前、正式採用された

名前は六式戦闘機『嵐』

全長 - 9.92 m 全幅 - 12.23 m

自重 - 3270

最高速度 567 km

航続距離 800 km

武装 - 7.7 mm 機銃 × 12

爆装 - 227kg 爆弾 x 2

発動機 - 震一型 1250馬力一基

Eよりも速度がほんのすこし劣るのだが

少なくとも零戦よりは優速であった

被弾にも強く運動性能も改良されよくなっている

武装はオリジナルのままである

なお『嵐』とは本機につけられた愛称である

義勇軍は日本軍の兵器ばかり

つかっていたが最近では現代人の介入などもあり

外国製の兵器も使うようになっていく

29・新兵器（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6052h/>

---

八号の異世界～ハルケギニア戦役勃発編

2010年11月13日12時02分発行